

義大夫手鑑



義太夫手鑑

全

自序

著者曩に『義太夫大鑑』上下二卷の著あり、今又特に其の下卷を別冊として刊行し、『義太夫手鑑』と題して、斯道好者の批鑑を仰くことにした。

惟ふに從來此種義太夫節の要義―語り方の心得を説いたものには、『淨瑠璃祕曲抄』がある。『音曲兩節辨』がある。『章句故實集』がある。『淨瑠璃道之枝折』がある。されど孰れも古い―祕傳書様の書き方にして、説いて詳しからざれば徹底せず、斯道好者の一人としての著者は、夙に此點に於て不満足を感ぜざるを得なかつたので、機會あらば一トつ、理論的に―當世流に、淨瑠璃要義の解説を書いて見たいとの宿志を有したのであつた。本書は即ち其の宿志の發現にして、淨瑠璃を語ると云ふ事の本義に就いては、出来るだけ詳しく論解して見た。詞―地合―節と區分して更に之を詳説して見た。聲音の習練―稽古の心得に就いても亦、無遠慮に私見を披瀝し、斯道先覺者の批判に訴へて見たのである。

回顧すれば著者が義太夫節に興味を持ち初めたのは齡二十二、笈を負うて上京し、神田の下宿屋の一室で、しきりに權利義務の研究に頭を悩まして居た明治二十四年の比よりの事にして、當時の東都の義太夫界は、夫の「八丁泣かせ」の綽名を取つた初代綾之助の全盛時代で、若竹本郷立花神田連小川神田等の各席に綾之助の招牌が懸るとなると、若い―客氣な書生連中は狂喜して押し懸け、詰め寄せ、連夜の満員、爲めに八町四方の附

近各席は、心細いほどお客の頭数が減じたとまで云はれたほどの人氣を作つて居たのであつた。

綾之助の全盛は、彼が男装せる若衆齧の少女時代より、文金島田の妙齡時代に涉り、可なり長く續いたのであるが、此の全盛濶歩の綾之助に對し、新に大阪より上ぼり、女に稀な堅實な語り口を以て、堂々正面より對抗競争を始めたのは竹本小清である。小清の外には小政あり、素行あり、加之、大阪名古屋あたりの女義中、續々上京して初上り初お目見々の看板を上げるあり、中にも熊梅、小土佐、土佐玉等はなか／＼の人氣を博したものに於て、此外東京出の若手の人氣者としては、越子あり、住之助あり、孰れも大小多少の量負連―彼等の一顰一笑を無上の光榮として、俤の後押しまでして其の尻を逐ひ廻はす所謂堂摺連―擁護黨を有し、各々對峙して人氣を作興して居たのであつて、當時著者も、折折小川亭や若竹などに出かけては、綾之助も聞き、小清も聞き、越子、住之助、小土佐等も聞き、併せて莫迦／＼しい堂摺連の堂摺振りも見て、而して徐々義太夫趣味に親み初めたのでありし。

言ふまでもなく明治以前の江戸の義太夫節は洵に憫れなものにして、維新當時までは、外神田に薩摩座あり、久松町に結城座あり、結城座は明治十年頃に退轉したやうに聞くのであるが、薩摩座の没落したのは孰時比であつたか判然しな細々ながらも操り芝居の興行をも試み居たりしが如しと雖も、都人の多くは「義太夫節など無粹極まるもの―隠居翁媪の餘閑潰しに聽くべきもの」として之を遇し、殆ど顧眄だも與へざるくらゐの有様なりし。されど明治も十年と經ち、二十年と過ぎ、

往時の江戸的氣分は變じて明治的氣分となり、東京ッ兒的氣風となり、其の趣味、其の好尚、まさにやうやく一變せんとするの時に際し、偶々青年客氣の書生連の歡呼喝采に迎へられて流行し出した娘義太夫が、端なくも斯の趣味鼓吹の動機となり、誘引となり、明治の二十八年には神田の表神保町に、新聲館なる操り芝居の定小屋まで創建さるゝほどの變調的機運に向つて來たのであつた。

新聲館一座の顔振は、綾瀨太夫を頭領として播磨太夫あり、織太夫あり、津賀太夫、駒太夫、識太夫、新呂太夫即今の呂太夫あり、三絃には豊吉あり、紋左衛門あり、大造あり、團八、廣兵衛、新兵衛、寛三郎あり、其の伎、其の藝、孰れも押しも押されもせぬ立派の顔振なりしと雖も、當時の人氣の目標は、藝では無くて容姿であつた。聽くのでなくて見るのであつた。露骨に云へば男でなくて女であつたのである。されば操り芝居は創立されたりと雖も、一座の人氣は一向に寄らず、幾もなくして閉座し、閉座後の一座は、別れて各寄席に出演して居たのであるが、無論其の人氣も馨しくはなかつたのである。

當時著者は幾回か新聲館に一座の淨瑠璃を聽いた。綾瀨太夫には敬服して了つた。女太夫の甲走つた―せよこましい節廻しばかりを渴仰して居た著者も、播磨太夫ののんびりとした美調妙音に接するに至つて、思はず嘆美の聲を放つたのである。織太夫も、良し識太夫も、良かつた。殊に識太夫の巧緻な語り方には、あの小音、あの惡聲を以て、能くも斯くまで語れるものだ、同情的感嘆を禁じ得なかつたのでありし。

此時よりして著者の義太夫趣味はやうやく其の根柢を下ろし始めたのであつた。

爾來各席をめぐつては、綾瀨太夫の『宗玄庵室』も聞いた。『嬢景清日向島』も聞いた。播磨太夫の『博多小女郎』も聞いた。『大文字屋』も聞いた。而して一回と了解も深うなれば、著眼點も得要領的となり、幾もなくして茲に大々の義太夫節崇拜者の一人が出来上る事となつたのである。

雖然、今にして惟みれば、當時の趣味と云ふも、崇拜と云ふも、實は一種の盲信的な直覺的な――至極幼稚なものにして、義太夫節なるものゝ起源も知らなければ、沿革も知らず、語られて居る正本が誰の手に成つたものか――語るに就ての苦心がどんなものか――研究の要點が那の邊に存するか――彼も此も一切御存じなしにして、さしたる理由もなければ、深い了解とてもなかつたのでありし。

然るに明治の三十年頃なりしと思ふ、一日神田の書肆を獵つて居ると、偶然にも『聲曲類纂』一部を發見した。讀んで見るに如何にも面白い、淨瑠璃節の始原より、木偶、三絃の來歴――太夫の列傳――古き芝居の面影など、凡ゆる著書雜記、隨筆の類に至るまで、斯道に關するものとし云へば悉く摘録類纂し、原本の古畫類までも轉寫されて在り、斯道研究の資料としては、洵に便利にして趣味多き好著であつたので、著者は此時恰もゆくりなき探險の途次、千古密鎖の一大寶庫にでも探し當てたやうな歡びと満足とを以て、驚喜したのであつた。後にして思へば『聲曲類纂』たる夙に聲曲愛好家の熟知の書にして、大阪邊の書肆には隨所に之を發見することを得る程のもので、別段珍書とか秘本とか稱するほどのものではなかつたのである。

爾來著者の義太夫研究慾は、非常な速度と熱度とを以て進んだのである。上野の圖

書館に通うては、先づ『聲曲類纂』に引用されて居る各書の原本を通讀して見て、又新たな感興に耽けるのであつた。淨瑠璃―操り芝居―近松研究に關する新しい著述類は、獵りに獵つて涉讀して見たのであつたが、這は又洵に寥々にして、僅に塚越停春『近松門左衛門』之氏著、高野辰『淨瑠璃竝に操略史』、小中村清『歌舞音樂略史』、川山星『淨瑠璃史』、大如電『俗曲の由來』位のものにして、之れには少からざる失望と不満足とを感ぜざるを得なかつたのでありし。

されど斯くして著者の研究も次第に秩序的となり、温故的となり、理論的となり來るに従うて、又新たな別種の研究慾が湧いて來たのである。淨瑠璃元來聲曲である。既に聲曲であり、語るべきものでありとすれば、今一步實地に踏み込んで見て、親しく稽古もし、語つても見ねば、眞個斯道の眞諦に悟入し、妙味を嚼み分くると云ふことは、出來ないのであるまいか……と云ふ一種の感じに捉へらるゝに至つたのであつた。

一日芝の烏森を通りかゝると、しきりにデン／＼の音が聞える。表札には竹本井筒太夫とあり、稽古屋らしい。そより立つやうに動いて來る新しい研究慾に吸ひ附けられて立ち止まつた著者は―幾回か躊躇の末―勇を鼓して門をくゞり、稽古志願の意を通ずると、譯もなく承引された。而して早速『三日太平記』の松下住家……これがそもそも著者が斯道に足を踏み込んだ初めにして、實に明治三十一年の秋の比であつたと記憶する。

井筒太夫は曾て文樂座に在り、越路太夫の弟子にして越磨太夫と稱したのだと聞い

た。無論左したる腕前の太夫では勿ツたのである。中途不平を起して廢業したが、三十一年上京、當時素人となつて居た和玉此の人は芝の鱗日本橋の和玉まで並び稱せられ、東京義界にては東西の大關と立てられた程の人である。の先名を繼いで井筒と稱し、看板も上げて見たれど思はしからざるより、退いて稽古所を開くと云ふことになつたのださうで、稽古所を創むるに付いて入門して力を添へたのは、先頃死んだ杉賈阿彌氏當時毎日新聞の劇評欄を擔任して居た。及賈阿彌氏の同人條野氏採菊氏の息だと聞いた、當時やまご新聞に在りし。外一人で、著者が入門したのは、稽古所創始後まだ二箇月とも經たぬ頃であつた。

弟子の顔振が右の通りであり、師匠は兎に角太夫出なり、殊に賈阿彌氏のやうな、型もの―デン―ものゝと來ては、指を折られたほどの劇通家もあると云ふ次第なれば、稽古の振合も、普通常例の遣り方とは大に趣を異にし、兎角理窟が多い。斯々の意味なれば、斯う語る―此の意味なればこそ斯うも發音する―イヤ斯う云ふ意味なるべし―ナニそんな意味ぢや無いなどと、研究が始まる。議論が始まる。誰某は斯う語つた―某太夫の語り口は斯うであるなどと、碌々淨瑠璃も語れもせぬ癖に理窟だけは一廉の大家振り、夫は―賑かなこと……爾後稽古所の位置は二三度移轉したが、著者は通じて四箇年ばかり稽古した。條野氏は長くは續かなかつたやうだが、賈阿彌氏は二箇年ばかりも續いたやうに思ふ。此の間に於て著者は、淨瑠璃正本の眞價たる、讀んでの面白味よりは、語つての興味にして、文の美も―構想の妙も、語り活かされてこそ一層の妙もあり、一段の味も發揮し來るものなることを、較々了悟することが出來たのでありし。

井筒太夫は其後東京を去り、大連に渡り、稽古所を始めて居たさうであるが、夫れより朝鮮に渡り、元山あたりには、涙の末病歿したとの事である。

其後暫く稽古も中絶したが、明治の三十六年であつたと記憶する。著者一日民事に關する先例調査の必要があり、司法省の民刑局に田中氏氏は著者の古い友人にして局の古參屬官なりし。を訪問すると、机の上に一冊の義太夫五行本が置かれてある。どうしたのかと聞けば、稽古を始めたんだと云ふ。良い師匠があるかと云へば、祖太夫即ち今の呂太夫。に教はつて居る——どうだ始めたら——宜しい——斯うして又始め出したのである。

祖太夫に就ての稽古の期間は餘りに長くはなかつたが熱心に通つた。而して獲る所は多大なりし。祖太夫の伎倆の優れたる、無論井筒などは比較にはならないのであるが、稽古の仕方亦一段と立優つて居つた。淨瑠璃を語る呼吸、發音の工合など、丁寧親切、細かに手を取るやうに教へて呉れる。文句を語り殺すな——文章の意味を語れと云ふことなど、幾多豊富な例證——さまざまな實歴談など打ちませて、囁んで含めるやうに説き明して貰うたのであつた。著者の義太夫研究の今日ある、たしかに此の間に得た幾多啓發的の教訓に負ふ所多いのである。

著者が斯道に關する閱歴は概略以上述ぶる所の如し。無論左したる修練を経たと云ふでもなければ、又左したる研究を積んだと云ふのでもなし。云はゞ幼稚園の鳩ボツポ——の組で、未だ——尋常科の一年生とまでも往き兼ねる未熟者である。今でこそ著者も、偶には衆人稠座の前で、臆面もなく——未熟な——生硬な——淨瑠璃の一節をも語つて見ることもあるのであるが、過ぎし十有幾年間の役人生活時代には、唯モ——官吏の體面と云ふ事ばかりを顧念して、發するよりは黙する方で——語つて樂むと云ふ事より

は、研究したり、穿鑿したり、書いて見たり、調べて見たり、獨り自ら樂んで、感懷を遣つて居たのでありし。

本書は畢竟著者が過去幾年かの間に、獨り自ら樂んで試み來つた研究餘録の集成にして、折に觸れ、興に乗じ、きれぐれながらも一枚二枚と書き溜めて置いた、斷片小録の集成である。いよ／＼上梓して世に問はんと決心してより、又改めて増補の筆をも加へたのではあるが、無論新奇もなければ、獨創の見もなし。

思ふに近松の妙文も、半二、松洛、宗輔、出雲等の傑作も、讀んだばかりでは眞の美—眞の妙は味ひ難し。畢竟語られてこそその眞價である。語つて見ての妙味である。著者の本書を成せる、蓋し汎く斯道の好者に問ひ、相共に研鑽して、眞に斯の道に遊び、斯の樂を盛にせんと欲するの意に外ならないのである矣。

大正六年晩秋

大連朶八庵に於て

著者 木 芳 識

義太夫手鑑目次

第一章 淨瑠璃を語るに云ふ事の意義……………一

義太夫節本來の約束 義太夫の太功記 播磨少
椽と順四軒の狐の子別れ 淨瑠璃を語るに云ふ

意義 淨瑠璃を語る―聲を語る 宇治加賀椽の教訓の一節 越路太
夫にし

ても一部の批難がある 體を語つた大隅太夫 二
代團平の稽古振 大隅太夫と三代目團平の追懷談 惡聲より大成した五代目

彌太夫 彌太夫の熱誠―
長門太夫の教訓

鼻唄式前受専門の淨瑠璃 外連決の辯 無理當自然
よた語りの泉太夫 一例として『艷容

女舞衣』の酒屋 太夫も太夫なれば三絃
彈も三絃彈である 三絃は弾けるが淨瑠璃を弾き

得る者幾人かある 原武太夫の『斷絃餘論』 斯曲の妙機を
道破した至言

不即不離の呼吸 三絃と離れて三
絃に外れぬ呼吸 節を語らずして淨瑠璃を語る 節に
提は

れて情を失ふは惡し聲に任
せて情を失ふは尙ほ不可也 竹本播磨少椽の教訓 情語りの達者は比較的惡
聲の人々に多し當分淺き

の太夫や三絃彈、響められて腹を立てた有隣大和ほどの
誠ある太夫幾人かある 中の響めと上の響めと下の響め

第二章 聲音と其の習練……………三〇

二の音が大事 三の音專一の淨瑠璃は餘り
にケバ立つて厭氣が來る おツとりとした妙味 基く所
は二の

音で 三絃の調子 宮古路豊後の『都の錦』の一節『豊
竹故事』の呂律五音十二調子の辯 所謂一聲―大將聲下

手聲、きばり聲 眞の美聲 惡聲も練磨と工夫

發音の調子の習練 咽喉の適不適よりは耳の良否 小音難聲も或程度までは矯正助長す

れば其の格に入ることが出来る しはがれ 聲音の習練と云ふ事の意義

たきばり聲は義太夫節本來の要望に非ず 聲を似せるよりは心を似せよ 聲音習練の三大要項 聲の力、聲の

重み、聲の色彩

佛教の聲曲科 聲明 佛門の聲曲家—式衆 各宗各派の聲明 眞宗の和讃念佛 聲明の音節を應用した平家の節調 聲

明と日本の聲曲

第三章 語り方の理論…………… 四四

通論…………… 四四

淨瑠璃を語ると云ふ事の二の意義 筋を語る—情を語る 淨瑠璃

五段の型式 一段の淨瑠璃には起承もあれば轉 一段の大綱を語り活か

すと云ふ事の必要 靜山急の呼吸 即ち語り方の三原則 間違つて居る稽古

の仕方 半端稽古は斷じて廢すべし

聲音の適不適は節を語り地合を語る上のみの事に非ず 詞を語る

にも亦適不適がある 詞の調子—抑揚—頓挫 語つての味—はた

らき—變化の妙は寧ろ詞に多し 地合で泣かされど 詞には泣かされる 泣かせるばかり

が淨瑠璃の極致でもなければ能事でも無し 要はホロリさせる位の程度 泣かし

て泣かせぬ呼吸 泣味増太夫と
ならぬ用心

詞には七分の強味がある 地合は或程度迄也 詞の呼吸活殺の妙用は
底知れず奥の知れざる

ほご深し まづい淨瑠璃
を一層まづく聽かせる 四代目住太夫の研究苦心の逸話

要するに一種の摸倣 形を摸倣すして情を摸倣る
聲を摸倣すして心を摸倣る 摸倣なるが故に上手

もあれば下手もある 稽古の必要もあれば修練の必要もある
三歳児の時より
経験して来たおぼろげな觀念を修練工夫して技巧化

するのが淨
瑠璃の修業 全然技巧一片口頭ばかりにては真箇の情味は出ないの

である 作中の人物となり境遇となる 稽古よりは自覺 淨瑠璃に
情の籠ら

ざるは型ばかりに拘々として根本的
の研究を勿語に附するの結果である

世話物と時代との語り方の區別 時代物を語るに就ての通則 生や
さし

き稽古と伎倆にては出来ぬ時代物
世話もの語りとして傳へられたるものは洵に少し
手も輩出して居るか時代もの語りの達人として 時

代物淨瑠璃の本來の性質 世話淨瑠璃の特長 世話時代物 世話

時代物を語るに付いて第一に心得べき事項 一例として「平假名
盛衰記」の松右衛門 世話

時代物淨瑠璃の特色と妙味 淨瑠璃の重みと輕み 其の
一例 間と云ふ

事阿吽一瞬の呼吸―間髪を容れざる刹那の氣合 黒いも白いも間

の持ち方一ツの巧拙に由る 間は息に非ず 寸分の油断も不用意も許さ
ざる義と心得べし
三絃が

弾き出せば語り出し、「節」が終れば息を繼
ぐと云ふやうな淺薄な了簡ではまだく也 間を持つ一例 息一ツ繼ぐ

にさへ注意を要す 息を盗む―鼻から息 其の
一例

節に切字 詞にも切字の必要 息を切らずして句を切る工夫 湯

餘錄

正本句解……………一
 淨瑠璃正本中に應用せられたる俚諺……………一四
 近松作世話淨瑠璃に應用せられたる俚諺……………二〇
 奇人と笑話……………三二

義太夫手鑑目次終

義太夫手鑑

秋山木芳著

第一章 淨瑠璃を語るに云ふ事の意義

義太夫節本來の約束

義太夫の太功記 播磨少
椽と順四軒の狐の子別れ

淨瑠璃を語ると云ふ事

の意義 淨瑠璃を語る——聲を語る 宇治加賀椽の教訓の一節

越路
太夫

にして一部の批難がある 體を語つた大隅太夫
二代團平の稽古振 大隅太夫と三代目團平の追懷談 惡聲より大成した五代目

彌太夫

彌太夫の熱誠
長門太夫の教訓

鼻唄式前受専門の淨瑠璃

外連決の辯 無理當自然
の辯 又語りの泉太夫

一例として『艶容女

舞衣』の酒屋

太夫も太夫なれば三
絃弾も三絃弾である

三絃は弾けるが淨瑠璃を弾き得る

者幾人かある 原武太夫の『斷絃餘論』

斯曲の妙機な
道破した至言

不即不離の呼吸

三絃と離れて三
絃に外れぬ呼吸

曲節を語らずして淨瑠璃を語る

に節

捉はれて情を失ふは惡し、聲に
任せて情を失ふは尙ほ不可也 竹本播磨少椽の教訓

情語りの達者は比較的惡
聲の人々に多し、當分凌

ぎの太夫や三絃彈 譽められて腹を立てた有隣大和ほどの
誠ある太夫幾人かある 中の譽めさ上の譽めさ下の譽め

惣じて淨瑠璃は唄ふと云はず語ると云ふ。之れ單り義太夫節に限るにあらず、河東

唄ふと語る

節にあれ、一中節にあれ、常盤津、清元、富本等、凡べての淨瑠璃を通じての事なりと雖も、も

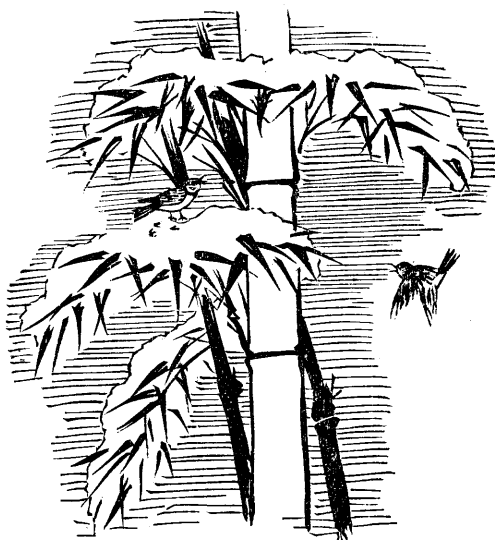
本文は義太夫大鑑下と同一のため、省略。
但し、間に上巻の挿図が挿入されている。

形ばかり學んださま
の誤解

る心掛けさへあつて語るとなれば、聽客も亦大方は辛抱して聽いて遣る氣にもなるのである。

多くの素人義太夫の先生達の中には、口を歪めさへすればうまく語れるものだと早合點し、伸び上がりさへすれば聲の出るものだと誤解し、さまざまの滑稽を演ずる人も尠くないのである。されど舌を使ふ事を知らずして無意味に唇を歪めて見たところで、何等效能のあるべき筈もなければ、其の氣が届かずして見臺に伸び上がつて見たところで、何の足し前になるべき筈もなし。從來より涎をくる人は淨瑠璃の上手と相場が極まつて居るやうに言はれて居るより誤解し、みねを張つて故らに涎をくる者さへある、是等は寧ろ滑稽と云ふべし。彌太夫、津太夫、大隅太夫等の伎倆もなく、心得もなくして夫れを學んで涎をくつて見た所で、何の取柄にもならないのである。もと／＼口を歪めるのも、涎をくるのも、畢竟は舌音（タチツテト）（舌端音）（ナニメネ）唇音（ハヒフヘホ）（唇音）（ワヅウエナ）（音）に注意し、舌を遣ひ唇を遣ふ事に苦心の餘り、見ねも體裁も構ふて居れざるより、ツイ／＼可笑な口振りどもなるのであつて、淨瑠璃の呼吸が詰んで、唾を嚥下す違さへなくなることから、自然に涎をくるやうにもなつて來るのである。さればいづれも自然であり、必要已むを得ないからの結果である。信心なれば宜しく其の原を質して之れに倣ふべきである。不體裁な形ばかり真似た所で何の效かあるべき。

不體裁な形ばかり真似た所で何の效かある



餘 錄

正 本 句 解

大凡淨瑠璃正本中には、雅言もあれば、俗語もあり、時代々の流行語もあれば、今日既に廢語となれるものもあり、著者の非才を以てして一々此等を正解せんことは太た難し。されば爰には單に現下の流行淨瑠璃正本中より、難解の字句數百を抜いて解疏を附し、聊斯道研究上の便覽に供することとする。

『生寫朝顔話』宿屋の段

「夜の襖の透もりて」

通例夜のふすまを云へば夜の衾を書き、寝衣に寢具の意味なれど、此處の文章は單に其の口調だけ

を借りたのみで、夜を利かせ、襖の透きより風のもるゝ旅宿のさびしきさまを利かせたる也。

「つれづれに詫る假宿の」「つれづれ」は徒然の意、「詫る」は

は「詫し」「詫す」など書きて、羽靜—幽寂を意味し、又心のさびしみを意味せり。されば「つれづれに詫る假宿の」は、つれづれにて詫しく感ずる假の宿」と書けるも同意義にして、旅宿の徒然ささびし

みさを云ひあらはしたる也。「見る程のものがいぢらしが」「い」と「はし」「いぢらしが」に同意義也。「かり」は「不憫がり」「不憫がる」

憫がる」「嬉しがり」「嬉しがる」と云ふ場合の「がり」「がる」と同じ意味の語にして、「いぢらしが」には「他の語に添へてその語の意味の如く心に思ふことを示す語」とあり、即ち「いぢらしく思ひ」と云ふ意味也。

「むざん成かな」「むざん」は情ない「いたましまし」と云ふ意味を一層強めて、

「むざんなるか」と書きたる也。「會釋」「挨拶」に同じ「なれの果」稽古本には馴の果と書けるも馴は當字、成若くは爲を正しとす。零落の極

て、「むざんなるか」と書きたる也。「誰かは憂を斗爲吟の」「斗爲吟」は「斗爲巾」を正しとすべし。琴の絃

「斗爲」十三の絃を中と云ふ。「問ひ」を「さす爪さへも八ッ橋の」筑紫琴の蘆奥を極めて

「斗爲」十三の憂を斗爲巾と懸けたる也。「さす爪さへも八ッ橋の」新曲を編み出せる八橋

檢校の名を取つて「八ッ橋の」に利せ、後句の「やつれ果てたる」に「ほい、ない、わかれ」
「けいごの意に」は「本意無くない」なり。不本意の別れの意味也。「物のあいろも水鳥の」
「ほい、ない、わかれ」に「あいろ」
「文」は「色」の約。「あや（文）め」は「水」をかけたる也。「しゆんだ話で氣がめいつた」
「しゆんだ話」
「見す」云ふべきは「文」に「水」をかけたる也。「しゆんだ話」
「氣が減入つた」にして、氣がめいつたは「正七ッの立立」
「七ッ」は寅の刻午前四時、午
二時、往時の時刻の一刻也。

夜 半

九ッ(子の刻)

正 午

九ッ(午の刻)

午前二時

八ッ(丑の刻)

午後二時

八ッ(未の刻)

同 四時

七ッ(寅の刻)

同 四時

七ッ(申の刻)

同 六時

六ッ(卯の刻)

同 六時

六ッ(酉の刻)

同 八時

五ッ(辰の刻)

同 八時

五ッ(戌の刻)

同 十時

四ッ(巳の刻)

同 十時

四ッ(亥の刻)

「取認むる」 「認むる」は「さうのふる」したく、
「認むる」は「さうのふる」したく、
「認むる」は「さうのふる」したく、

「意地くね悪い岩代」 「意地」は「心根」
「意地」は「心根」

「心そぐはぬ駒澤岩代」 「心そぐ」は「心そぐ」
「心そぐ」は「心そぐ」

「冥加に餘る事」 「冥加」は神佛のめぐみの意、
「冥加」は神佛のめぐみの意、

「儂やれ」 「おのれ」は「我」「汝」ニツの意味に用ゐらる、
「おのれ」は「我」「汝」ニツの意味に用ゐらる、

「假名手本忠臣藏」之山段 「仁躰捨し遊びなり」
「仁躰」は身分、
「仁躰」は身分、

「詞もしごろ足元もしごろに見ゆる」 「しごろ」はだらし、
「しごろ」はだらし、

さしやんすな

「はたへる」は俗語、騒ぎ戯れる意味。

「昔の奏者今のりん」

「奏者」はもとく群臣の奏事を取次ぎて

奏問する官人の稱なれど、後には僭して幕府時代には奏者番なるものさへ設け、小祿の諸侯をたして此の役に勤めしむるに至れり。さばれど陪臣由良之助の取次に「奏者」なごさは餘りに不倫なる使ひ方である。爰では單に走筆上、幾分滑稽的に書き下し「どうれと云ふもつかうご成」

「どうれ」は「誰れ」の意轉なるべし。「今のりん」の「りん」の意味難解。「あいやけ」は「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

「あいやけ同志」は「あいやけ」を正し「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

「あいやけ同志」は「あいやけ」を正し「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

「あいやけ同志」は「あいやけ」を正し「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

「あいやけ同志」は「あいやけ」を正し「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

「あいやけ同志」は「あいやけ」を正し「あびや」の意轉なるべし。案内には難解。「あいやけ同志」

義經腰越狀 泉三郎館之段

「ごすで喰べた」 「ごす」は「胡麻酔」の約。胡麻酔は、胡麻を炒り摺鉢にて摺り醬油にてのべし酔を和したるもの。「銅のつるかけ」

「つるかけ」は「銚子」の附いた銚子也。「やくたいもない」 「つまらない」「ちもない」と同じ意味也。「さよろりが味噌」

此の意味難解。四國邊の方言に、きよるりとして感じのしない人。「コリヤ伽羅め」 「伽羅」は若くは態度を「きよる糞」と云へるよし、或は此等の意味歟。「コリヤ伽羅め」 「伽羅」は一種轉じて物事をほめて云ふ辭となれる也。女などをほめそやす詞にも使はる。されば爰にては、後藤の醉態を寫さんがため、自己の女房なから「コリヤ伽羅め、あいなむらぬか、おさへかき、しなだれか、置いた後、の本意を明して、悪るふさげする様を書き、斯く極端「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」 「あひしをらぬかおさへかき」

らぬの意。」「大手の大将」城廓の正面を大手と云ひ、後面を搦手と云ふ。大手を追手と云くは古

オツテと云ふも如何なれど、假りに之を許すも、大手は假名オホテなれば彼此相違せり。大

手は、第宅の正面を大門と云ふも同じ意味に於ての大にして山手、海手と云ふの手なるべし。搦手

の語源詳ならざれど、搦はくくり(括り)の意味あれ。「泉三郎様のおかもじ」「おかもじ」は

曲輪の括りなる故、爾か呼び慣はしたるもの歟。「泉三郎様のおかもじ」「おかもじ」は

と云ふに同じ。元來物の名の頭の假名の一字又は二字を取り、夫れに「もじ」とつけて呼び慣は

したること、足利時代に始まる。譬へば杓子を「しやもじ」髪を「かもじ」と云ふが如し。婦人の

辭也。「おかもじ」も亦同じ。本來也。「まがひの平打紐と自慢たら」は「たら」は「滴々」

「おかもじ」と云へる語より轉じてたる也。「まがひの平打紐と自慢たら」は「たら」は「滴々」

にして、水の絶えず滴る形なれば、「始終自慢ばつかし」と云ふ意味なる也。「だら」は次第に

傾き下る意味なれば、此場合に相當せず、されば濁らぬがよし。最も前後發音の關係より同じ意味

にても、或はたらりと發音し、或はだらりと發音することもあるべし。「ぎやうくしや」

成は正則に従ふがよし。「まがひの平打紐」。「まがひ」の意味難解。「ぎやうくしや」

仰山な―大意や。「揃ひに揃ひし弓取や」。「弓取」はもの。「絞纈の鎧直垂」。「鎧直

垂」は「鎧直垂」は「直垂」に非ず、鎧を著るまきの直垂―即ち鎧直垂と云ふ一ツの名稱にして、之

は區別する爲めには、普通の直垂をば出仕直垂とも稱する也。鎧を著る時の順序は、「まづ肌の小

袖大口の袴を著し、鳥帽子鉢巻して弓懸をさし、鎧直垂、袴、次は腰巾着、ついで袴の裾を括り、次は

當あて、頼貫をはく次に脇桶、次に右の籠手をさし、左は直垂の袖をまくり、肩の際にて袖括りして

其の上を籠手をさす、次に鎧をさして投げかけ、高紐、引合の緒を結び、上帯しめて鞘巻をさし、「紫

太刀佩くを順序とす。」(國史大辭典)「絞纈」は絞もしほり纈もしほり也。纈の音はケツ。「紫

「箱根靈驗覺仇討」段

「ずばらくぬかす」「ずばらく」の意味明確ならざるも、「す

たるは、語呂をよくせ」が爲めなるべき歟。「きす迄引して」「きす」は蛤也。「蛤の吸物まで喰はせて」の意味

も解し得べきが如し、雖も爰にては生粹の上酒まで飲ましての意味となり、飲ましての意味ともな

出物としての意味にして、轉じて馳走の意味となり、喰はせての意味となり、飲ましての意味ともな

也。「したみでない上白」「したみ」は「溜り酒」也。其の溜り酒で無い上酒と云ふ意味。「上

落」京都に「出し抜いたらもふ佛の椀」。「佛椀」は「金椀」

「優曇華の時待

得たる對面」 「優曇華」は佛教の語、想像の植物の名。三千年にして一たび花咲く云ふ。達た對面さ。 「身は八裂の刑罰」 「八裂」は、ずだぐ、裂れる意味。 「母も涙にくづをれて」 「くづ」は「くづほれて」を正しとすべし。類

『假名手本忠臣藏』家之段

「わごりよ」

「汝」「そなた」に同じ。りよと附けたるは、恰も「娶御」を「娶御りよ」と云ふが如し。往時の

一種の詞の使ひ方にして、此の外に「兄」と云ふべきを「兄き」「叔父」と云ふべきを「叔父き」と云ひ、女には「姉」と云ふべきも「姉御」「伯母」と云ふべきを「伯母御」と云へるが如し。此の種の使ひ方さ。 「弓手め手」 「弓手」は弓を持つ手、即ち左の手也。轉じて方角の左を示す時、右を示す時にも轉じて方角の右を示す時にも使はるゝ也。 「控者」 「うつけもの」ては思慮の無きば、空しき事爰に。 「身のたふすみなき故」 「たふすみ」「たふすむ」は、たちとまる意味。爰 「紫磨黄金」 「紫磨」佛

四別して金剛、閻浮檀金、紫金、眞金と云へり。「紫磨黄金」は即ち紫金也。「縞の財布」の縞と懸けたる也。近松作の正本には能く此の語を使ふて居る。例へば『松風村雨東帶鑑』に「紫磨黄金の大床に美妙壯嚴の壇を構へ」云々。『三世相』に「四方に四句の大磨紫磨黄金のまき柱」云々。

『八陣守護城』目册

「ゆふしでの神」

「ゆふしで」は木綿垂にして玉串、注連などにかくる垂なり。神樂歌に「ゆふしで」なる曲名あり、其の歌詞に「ゆふしでの神のさきだにいなほのほ」云々と云へり。爰にては「云ふ」を「ゆふ」とかけ、神の結ぶの縁さかけんがために、此の歌句中より取り來れるものなるべし。 「物いみ

なりとは心得ず」 「物いみ」は「物忌」にして、神佛を祭るに際し、謹慎して穢れたる物に觸るゝことを忌む事也。 「數輩を相手に」 「數輩」はすばいと發音すべく、數人の數輩を相手にの意味也。 「親子兄弟矛盾なるも」 予柄ぐ「矛」は攻むる方、「楯」は防ぐ方なれば敵同士なるるの。 「輪廻に迷ふ心根を」 「輪廻」は佛語因果の轉廻に用ゐらる。爰にては愛なる意味なる云ふと同。 「御息もじ」 「御息もじ」は「御息災」に同じ。前にも云へるが如く、「かもじ」の一義也。 「御息もじ」 「御息もじ」「しやもじ」と同じ使ひ方により、「もじ」と附けたるものにして、古き一種の使ひ方也。「お恥しい」を「おほもじ」と云ふに等し。

『攝州合邦辻』下卷

「藪だくみ」

「おりかさなり、つみかさなるを疊むと云ふ。されば「藪だくみ」は、かさなりおふて繁れる藪と云ふ意なるべし。

「生て業をさらさうより」 現世にさまぐの憂い目辛ひ目なまきけ目を見るのは凡て前

さらす」云 「泣寄のしん身」 「親は泣き寄り他人は食寄り」云云 俚諺を應用したるもの

ける也 「程ふる娘の顔」 「程」は分量を示す。爰にては餘程經 「かゝれどてしも

黒髪の」 「かゝれどてしも」は、「かくあれどてしも」なり。古歌を應用したもので、かくあれどて

はなんだ一剃りこぼちて仕舞はふ 思はなんだ一黒髪云ふ意也 「けんもほろろ」 無愛素なる意味。ケンもホロロも共

より、斯くは言ひ慣は 「我業満す母上に」 我業一前世にて受けたる自己の悪業を、 「か

したるものなるべし。 「口利根に云ひ廻はしても」 「口利根」は文字重なる故利根と書きたるものなるべし。

「外には爺の親粒が」 「親粒」は親珠の意、味で一爺親と云ふべきところを字配り悪き故 「爺

の」さし一「親」さかけ一「親粒」とつけたるまでなるべし 「鈕も早めて責念佛」 「責

佛」は難解 責める云ふ辭には詰める云ふ意也 「百八煩惱」 「煩惱」は佛語。人間

佛になり得ざる迷ひ也。其の情慾百 八あり云へる故百八煩惱云ふ也 「伽羅先代萩」 義岡忠

「まさなき事も身にかゝる」 「我身の所業」は、爰にては、根據なき事

「濫面作り」 「濫面」は「しぶつら」にして音讀して濫面一不満足らしき顔つきにも用ゐらる。

「けふとい事の」 「けふとい事」は「けうとい事」を正しとすべし。元來はうさまし疎と云ふ義、即

意味もあり。されど爰にては「珍らしく感心な事」云へる意味に 「風爐」 茶道に用ふる

使ひたるもの如し。「希有」の意味に謬り用ゐたるものなるべし。 「はごくみかへす鳥羽玉の涙を隠すうない髪」 「は

ごくみ」は「はごくみ」の轉つる意に用ゐらる。「はごくみかへす」は所謂反哺の義にして、鳥に反哺

の孝ありと云ふ語あるにより、鳥羽玉と懸け一再び涙をかけた也。「うない髪」は「うなぬ髪」を

正しとすべし。「うなぬ」は「髻髪」にして幼き人の項に垂るる髪一垂れ髪の稱呼なれば、うなぬ髪

さ云つては重語の嫌ありと雖も、今は一般に「うなぬ」を幼童の意味に用ゐる。「果報を請た
なる髪と重ねてこそ初めて幼童の垂れ髪と解せらるゝ様に慣用されて居る。」

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善
「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

「因善果」も「果報」も「因果」も同一義にして、人の禍福はすべて前世の因縁の報らしむる所、善

れて遠近に音する方を眺れば、ふしぎや川邊に立ならびし柳の一本の動くも、見へしが、忽人體の形を顯はし、音にや、蓮花王坊、我こそ此山谷に生出し、柳の精靈也、非常の類成さ、いへ共、天の折から、柳の坐を籠て、枝を交自然、さ連理の、有様行場の、穢さ、枝を切、夫より、夫婦二木、成連理の契り、又、一木の柳は、是女身を、不斷有縁、かたき、御法を、聞き、其の功力、此身は、非情の果を、通れ、今、界に生を受、魂、さ現はれ、大空に、飛去し、こふしぎなれ、此魂、則申有、留つて、常陸の國の、片邊に、横會根の、平太郎、さ生る、さかや、云々、又、其の二段目には、右大臣、殿正、傍た、いかに、忠盛、貴、邊の、勳功、宣餘の、義に、あ、界、殿を、赦され、其の上、女御を、給はる、事、家の、繁昌、身有、所、に、三夜、につ、く、靈夢、法皇の、前生、は、蓮花、王、坊、さ、いふ、修驗、者、三山、百度の、歩の、熊野、權現、へ、御立、願、心、發り、忽、破、旬の、怒を、受、谷底、へ、投、付られ、支體、は、生、の、觸、體、風、の、吹、度、々、に、動、く、に、連、れて、頭、痛、の、腦、星、霜、遙、に、移、り、谷、の、柳、は、六、十、餘、丈、に、生、茂、り、梢、に、殘、る、三、間、堂、の、御、堂、建、立、あ、ら、ん、さ、の、結、構、則、忠、盛、へ、任、す、へ、し、こ、の、院、宣、也、さ、述、給、ふ、と、云、へ、る、が、如、く、に、意、味、も、之、れ、に、て、概、略、は、見、る、の、外、な、し。

「御は爰に玉きはる」 「玉きはる」は「魂極る」に
 追爰にては、最期の「愛著にひかされて」 愛著は愛執に同じ、夫婦父子
 追れるを云ふ也。 等の愛情に執著すること。 「何でもほり

出ししこためん」と 「しこためん」は「しこたま」は「た
 くさん」の意、「ためん」は「貯めん」にして集るの義ありされば何ん
 てもほり出し澤山せしめ 「大だら差足」 にして、及の、は、の、の、の、ひるき刀也。 「段平」 「山家

のどろく」 「どろく」は解し難し。「どろく」は「さるける」と同意義にして、心のしまりなくな
 る意味もあればあまりにばか正直にして物事の、は、か、く、しく運ばざる義にも使は
 するの、と云ふ様な意味さなりたるなるべき歟。 「どこやらぞろろがみ立退きしが」

「どろくがみ立つ」は、髪そくげ立つの意。 「氣は半亂」 「半狂亂也。 「こけ猿めらが命の
 義、ぞつとするほごいやな氣持の意。 「地車」 物を運ぶ
 宿がへ」 「こけ猿」は昔猿に、 大なる車。

『基太平記白石噺』新吉原 「部屋は上品」 「上品」は最上と云ふに同じ。吉原を極樂淨土に
 段 譬へ、廊の内は萬燈會と云ひ、一歌舞の菩薩の淨土に

さ云へるより、部屋は上品と 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫
 佛語を用ゐて形容したる也。 なるべし。元來今の吉原揚屋の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

段 佛語を用ゐて形容したる也。 「錦の小より三ツ蒲團」 「小より」は解し難し、小夜著の誤寫

の本文は、後人に改作せられたもので、原作とは相違あり。冒頭なども原作は「打連内にぞ入にける。早晝見せも入相に、花ごさ巻て片寄て簾おるせげ明障子勝手はまつかは膳盡し美を盡したるよれ達、皆様お出さ夕まくの、用たす禿大根漬ちよつこ向ふへ一つ口の、茄子も色のゑふ喰、二階座敷は身拵、新造お出さ夕まくの、には、こぶ櫛箱鏡臺に、其の隙をう一つ口の花の姿を宮城野さ、座敷の萩の露をのみ、さばらば落んへ……」こあり。夫れが今のごまくに改竄せられたもので、信紋日もよそに宮里が、モシおいらんへ……」こあり。夫れが今のごまくに改竄せられたもので、信夫の出し、「新造二人が伴ふてサア、こちらへさ座敷の内、おのぶはついに見なれぬ簾、箭筒、夜の具に三ッ蒲團あからむ顔の緋縮緬、うろく見廻し……」こあつたのが、今の如く改竄せられたのである。されば「錦の小より三ッ蒲團」は原作の「錦の夜具に三ッ蒲團」にして、時しも夏の事でもあれば、原交にもせは、明く障子とありて夜具を小夜著と改めて語呂をも能くしたるものなるべし。

「おしやらくの櫛」 「おしやらく」は遊女(陸奥國の方)言。「あくごのあざれ」 「あくご」は踵(東國の方言)足の裏の後部。

「糠もくづるゝ高笑」 「若い時は糠の崩れるのもおかし」と云。「浪花の蘆も伊勢

の濱萩」 「草の名も所によりて變るなり」と云ふ前句に「浪花の蘆は」 「奥のどろくの

お客」 「見るべし」は難解。前の「三十三間堂棟由來」の「山家のどろく」の解を「直に見と

らへたおらだけが心」 直接に見て居た自「なしよにもかしよにも」 何に仕様に

にも、どう仕様に、 「がひに苦勞とは思はなんだ」 「がひに」は「がいに」を正し

「はかない事」 さひない事さ同義也

「鶴山古跡松」 雪責 「しんきな顔」 しんきくさい顔の義。「しんきくさい」は

い繕ふみだれ髪」 「しよてい」は體裁さ「争よごむ」 「よごむ」はしげし

せこめて問共云はず」 「せこめて」は呵責の義。「せ」 「五臓六腑」 肝、心、脾、肺、腎の五臓、

三焦の六腑也。「しをり戸」 「しをり戸」は柴折戸にして、もさ柴なご折りか、 「切戸」 「切戸」

の扉をつけたる戸、庭先きの小門などに立つる戸也。

「菅原傳授手習鑑」 寺子屋 「おさましや」 「おさまし」は「うさまし」の轉語。「うさ

まし」は可レ疎にして、嫌はしの意味あり。

されば爰にては現代語の「ア、驕がし、嫌いぢや〜」の意味を解すべし。やは感嘆詞。よ。さ同じ。おさましよと云ふに同じ。されば發音の際はおさましよと正しく發音すべし。

「梳白者」 「梳白」はいたづら小童の意味。「わつば」は「わらば」(十歳前後の兒)の音便にして、無理を云ひ我儘を云ふ兒童なる也。「悪あがき」 「あがき」は「足掻き」にして、も馬の前足にて地を掻くさまを云へる也。爰にては、はげしき悪戯と云ふ意味に書きたる也。「さがない人」 「さがない人」は善くない人、惡ふに同じ。「常ならぬきつ相」 「きつ相」は血相の轉。「一かばちか」 「一か、八か」に於て成敗を一擧に突の語なるべし。「死出三途の御供」 三途は佛語にして、火途一血途一及途之れを三途と云ひ、亡り之を渡りて、地獄(火途)餓鬼(及途)畜生道(血途)に往くべき途と云はる。三途の川は冥土の入り口にあ

わかる。即ち本文は死出の旅路の御供と云ふ義也。「ちよつばくさ」 「ちよつばく」は「ちよつばく」の義あり。「くさ」は一種の俗語、助動詞なるべし。「あの子が業か母御の因果か」 「業」も「因果」も「加羅先代」の條下に解説せり。「はしごくて」 芹生附近の方言。兒童の遊戯がけん。關東の「ちんくも」 「ふん込む足もげし止む内」 「げし」は「異し」にして、「げし」が「く」に同じなりと云ふ。「女もしれ者」 「しれ者」はもろく、痴者と書き、愚に發する息。「吐息」はため息にして、暫く呼吸を止めてほつと吐く息也。「青息吐息」 「青息」は「青息」の時、反對にして、かの俗語の「しらべくれる」と云ふ辭より取り、知らぬふりを裝ふて居る曲者(しらべくれ者)と云ふが如き意味に書きたるものなるべし。「六道能化の弟子になり」 地藏菩薩は六道能化の菩薩の弟子になり、地蔵菩薩の弟子になり、同義也。

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「王藻前曦杖」 道春館 「辭讓の詞に一揖し」 「辭讓」は謙遜したる挨拶の意也。一揖は一禮に同じ。「歸るる」

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

「歸るる」は歸る時歸る途の義あり、即ち「歸りかけ」にの意也。「定業」 前世の因により、定まれる業也。「様々のよまい言」 「よまい言」は世迷言なるべし。さればいに非ず、ひを正しと云ふに同じ。「姿も對の雪柳」 雙六に證、雙六に紙、雙六の別あり、「戀女房」も等しく、白小袖を著し、しほれ出たる故對の雪柳と形容したる也。「重」 染分手綱(近松門左衛門原作「丹波與作」)

の三吉の雙六は紙雙六にして、此の場の雙六は盤雙六なり。盤雙六は支那より傳來せるもの。持統天皇紀の三年十二月の條に、「丙辰禁斷雙六」と書かれたり。此の事なれば此の戲の行はれたる太が見ゆ。盤は縦七八寸横一尺餘高さ四五寸位の木盤にして、雙方に十二つ々の目を盛じられたる馬を共進め、早く敵相手の陣中に入りたるものを勝ちとするの定め也。重一―一六―五二―四三、いつれも采(賽)の目の數也。重一は「でつち」と讀むべし。一の目の並びあらはるゝこ、即ち二つに采(賽)も一ばかり現はれたる也。一六は一方の目は一―一方の目は六こあらはれたる也。右五二―四三―ともいふ意味を知るべし。

「其方が無得心」 「無得心」は不得心なるべし。元來不得心は得さ云ふが如き意。 「獄卒め」 「獄卒」は地獄にて亡者を苛責する鬼の稱也。

「内侍所」 天照大神の御靈代を鏡其のものを内侍所と云ふ。内侍の守護せるより此の稱呼起れる也。轉じて御 「一期の夢」 「一期」は人の一生―生れてより死するまでを一期と云ふ。十八年の短き夢の如き一生と云へる也。

「天網島時雨の炬燵」 紙屋の段 「直に佛なり」 這は前文の「是も十夜の如來のお蔭是から成共の句也。末 「きよとくしい」 いたくまじいと云ふ意。 「町の女房ぢや」 町家の女房と云ふことを對照し。 「親にもかへぬ」 親にも見かへぬの意。 「ひよんな事」 現代語の「飛んだ事」と云ふに同じ。

「ないませの紐付帛紗」 「ないませ」は「陶交ぜ」にして、色絲などをないませでたる紐の意なり。原文には、「立て筆筒の小引出、明て惜氣もないませの紐付袋押ひらき」とあり、もさく惜氣もないと懸け、書き下されて居たりしものなるをば、何の意味をも持たせず、「立つて筆筒の小引出、明て取出すないませの紐付帛紗云々」と改竄したるさへ、感服出來ざる次第なるに、紐付袋なれば容易に解釋も出來得べきものなるを紐付帛紗と改竄したるため、遂に難解の文句となし了りたるなご、如何にも馬鹿げて居る次第也。

「うぢく」 じくくの意。 「あんだらくさい」 「あんだら」は鹿げて居る次第也。 「ないませぬ銀山」 「ないませぬ」は「あり方もせぬ」の意。全く反對の遣ひ方なれど大阪言。「ばか」と云ふ意。「あんだら」の意也。 「ないませぬ銀山」の意。全く反對の遣ひ方なれど大阪邊では、往々斯の如き詞の使ひ方あり。

「口あんどり」 「あんどり」は「あんどり」の思はず茫然と口を開くさま也。 「あふ

「戀女房染分手綱」香掛村 「かはる渡世も口ごはき」馬方渡世なるが故に悍馬跳ねあはるく馬などの口ごはき 「いざり仕事」「いざり」は「おざり」を正しとすべし。

「戀女房染分手綱」香掛村

「かはる渡世も口ごはき」

「いざり仕事」

「間引糝」間引菜の糝炊也。間引菜とは蕪菁の類を八月頃種を蒔き九月頃苗の生じたるを、「豆板程な涙」豆板は貨幣小玉の銀也。銀玉一粒銀一豆銀とも云ふ。鑄かけの儘に云ふ義。「あ

「たつぽこしもないほてつばら」「あつぽこしもない」は「あつぽこしゆもない」の訛り

「七ツの日脚傾けば」「七ツ」は申の刻、今の午後四時。 「ひきがらの火の煙草盆」籠の火を引いた其の焚きがらの火を入れた煙草盆の意なるべし。 「取

「窓覗けば」「初夜」は、夕方より夜半までを指して云ふこととあれば戌の刻の稱にも使はれ又戌後八時を云ひしものにして、戌より亥と懸けて戌亥窓とつづけたる也。戌亥窓は戌亥の方角の窓と云ふことなるべきも、必ずしも深き意味あるにあらず、唯戌より亥とかけんが爲めに文飾の都合とす。一點は三十分也。されば丑の一點と云へば、二時即ち丑の刻より二時三十分、二點は、二時三十分より三時まで、三時は、丑の三點となるが如し。 「是は又やくたない」「やくたない」は「益も無し」より來る。「らちもなし」は「益も無し」

「ごたくばるな」「ごたく」は「御託」にして、ごたくならざる言ふ事也。「ごたくばるな」は「ごたくならざる言ふ事也。」

以上は主として現下の流行淨瑠璃中の一部より、俗語方言等の解し難きものを選んで、解釋を試みたるに過ぎないのであるが現下の流行淨瑠璃とても、其數太だ

多く、此等全般に涉りて仔細に註釋を試みんことは、もとより本書の許す所に非ざるを以て左までとは之を略した。但、淨瑠璃正本中、佛語又は佛説より出たる熟語を使用せるもの太た多きにより、左に其の用語の幾種かに就いて解釋を試み、不足を補ふことすべし。

「南無三寶」は梵語、那謨の轉、歸命頂禮又は眞實の義にして、佛に祈る時の發語也。「三寶」時に唱へたる發語なりしなるべし、雖も今は身命の危急に迫れる時、若くは事を過ちて嘆息する時などに、偶然無意味に發する發語の如くになり來れる也。「南無三寶」は「南無三寶」取り遁がしたか、の如し。現代語に「ア、しまつた」云ふが如き意味。「南無三寶」は其の約同義。「奈落」「菩提」共に梵語。「奈落」は地獄の地獄、「奈落の底」云へば底の知れぬほど深しと云ふ意。「菩提」は正道、迷を離れて悟を開くこと、佛の道に歸依すること、念佛すること等々の意。「菩提心」云へば佛心、佛道に入る心さの意。「唱名」佛名を唱ふる、念佛と同義。「十念」淨土宗にて信者に六字の名號を授け、三

世の縁 親子は一世、夫婦は二世、主従三世の縁と云はる佛説。「出離生死」生死を離れて菩提に入る也。「二十四孝」

あるは即ち此の意也。「有爲無常」常は人間の常無きを云へる佛語、されば「有爲無常」あるは

現世は常無しと云へる意味にして、「有爲轉變」も亦世事の移り變り易きを云へる語也。「佛事供養」「追善供養」佛事は佛法の

養は亡き人の跡を吊ふ意。「追善」は亡き人の年回などに其の冥福を祈りて佛事を營む事。「回向」讀經念佛して亡者の

人の死後七々四十九日間、魂姿婆を去りて未だ極樂淨土にも達せず、兩途の間に迷ひ居る也。其の間を「中有」と云ふ也。又中陰とも云ふ。魂中有に迷ふは此れに出づ。「彌陀

の利劍」利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除と云ふて、念佛一廻すれば、いかなる罪障も悉皆消滅すること、恰も利劍を以て物を斷つが如しと云へる佛説也。「善知

識」佛説に人をして善に向はしむるを善知識と云ふ、悟道に入る導き也。「四苦八苦」生老病死之れ四苦也。此の四

陰の四苦を加へたるもの八苦也。此の意味より轉じてさんぐの苦みと云ふ義となる。「五逆」「十惡」殺父母、破和合僧、出佛身血、

逆殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見之れ十惡也。「三惡道」地獄、餓鬼、畜生道。「一百三十

六地獄

等活―黒繩―衆合―叫喚―大叫喚―焦熱―大焦熱―無間地獄之れ八大地獄也。此の

なる「氷の地獄」八寒地獄の中也。「劍の山」等活地獄の中にて、其の及の利こも毛筋も説

る。「死出の山」冥途に在りて云ふ山。(水谷氏註)「寂光淨土」四佛土の一つ。「九品」

上品上生―上品中生―上品下生―中品上生―中品中生―中品下生―下品上生―下品中生―下品下生之れ九品也。九品は極樂往生相の等階也。「三衣」即ち大衣―

七條―五條之れ三衣と云ふ。「五戒」殺生―偷盜―邪淫―妄語「三世諸佛」三世は過去―現在―未

て三千佛あり。「天魔」「破旬」惡魔也。「三界」色界―色界―無「因果人」「業人」

共に前世の罪業「補陀落」補陀落や岸打つ浪は三熊野の那智の御山に……の巡禮歌に云へ

深きものさの意「彌陀頻伽」極樂に居る不死の鳥、面は美女の如

く其聲最も美なる。故に「夕霧阿

波鳴渡」には「誠ある傾誠と迦陵頻伽の雄鳥」靈地」あちた「彌陀の四十八願」二無

惡趣不更惡趣悉皆金色無有好醜宿命智通天眼智通天耳智通住心智通神足智通漏盡智通必至滅度

光明無量壽命無量聲聞無數眷屬長壽不聞惡名諸佛吞嗟念佛往生臨終現前係念定生具生二相必至

觸光柔軟聞名得忍女人成佛聞名梵行人天致敬衣服隨念常受快樂見諸佛土聞名具根聞名得定聞名

尊貴聞名具德聞名見佛隨意聞法聞名不退得三法忍之れ彌陀の四十八願也。「夕霧阿波鳴渡」に、俗

に紙衣の四十八枚と云へる諺あるより懸かて「四十八枚彌陀の願」を云ひ更に紙子の繼ぎ

に佛説の平等施一切を懸けて、「つぎは平等施一切」と書き下したる才筆のはたらき也。

淨瑠璃正本中に應用せられた俚諺

淨瑠璃の正本ほど巧に俚諺を應用したるものは無し。例せば福内鬼外作「神

靈矢口渡』頓兵衛住家の一段の淨瑠璃の中に於てさへ、「**鳶が孔雀のぼつとり者**、**田舎に惜き姿也**」—「お娘御のお前が、竈本の世話なさるで、可愛らしい其お手が荒ふかど、思へば悲しうて、**酸漿はごな血の涙**」—「**少許負た逆鍋の鑄懸が釣鐘を請合ふた様に……**」—「**塵が積つて山と云へど、積る内には又吹ちる**」—「何ぼ口説いても**戸板にごろ付豆よ、其豆故……**」—「口へ出まかせ間に合を、いふて水棹や詞の**かぢ、わたりに舟と六藏は、のせかけられてふはどのり**」等、幾多の俚諺が取り入れられて、巧に文飾されて居るのである。

現下の流行淨瑠璃正本中に應用されて居る俚諺はなかくに多し。今左に其の幾分を抜いで例示し、注釋を試み、研究に資することとする。

「愛相もこそも盡き果てた」

『桂川連理柵』(帯屋の段に、「此の身は何たる大悪人愛相もこそも盡き果てた」云々。愛相が盡きたと云ふ意なれども愛相も

こそも重れて意味を強め、語呂を能くしたのである。

「逢ふた時に笠脱げ」

凡べて何事も機會を取り外すなごの意。『蘆屋道満大内鑑』(二段目の切に、

「もうさうくはだまされぬ逢ふた時に笠脱げちやそれ家來共娘を引立て……」

「悪人の友を棄て善人の敵を招け」 善人の敵

は悪友に勝るの意。謡曲『敦盛』に在り。『一の谷嫩軍記』(組打ちの段にも、「ア、

愚や直實、悪人の友を棄、善人の敵を招けとは此事、早や首打てなき跡の……」云々

「餘り茶

に福がある」

「餘り物に福がある」と同義。『伊賀越道中双六』(關所の段に「是はきつい御馳走餘り茶に福がある然らば今一つ」云々

「蟻の穴か

ら堤がくづれる」

小事より大事が破れるの意。『戀女房染分手綱』(原作、「丹波與作」重の井子別れの段に「蟻の穴から堤がくづれる、軽い様で重ひこそひそく云ふ

ても人も聞

「一合取つても武士は武士」

小祿にても武士には武士の本分ありと云ふ義。『阿波鳴戸』(十郎兵衛内の段に「一合取つて

も士の家に生れた……」

「一字千金」

『童子教』に「一字當千金一點助他生」とあり、之より出たる俚諺にして、一字の價千金にも當りて

貴しとの意。『菅原傳授手習鑑』(寺子屋少段の冒頭は、即ち此の『童子教』の句に由來せるも、のにして、其の「二千金」を受け、「三千世界」をつゞけたる如何にも語呂の能い章句である。

「一樹の蔭一河の流も他生の縁」 『平家物語』に、「一樹の蔭に宿るも前世の契淺からず、同

人も深いゝに聞くもの、藁の上から育て上げ……」云々 「一寸のびれば尋のびる」

「梅野由兵衛」聚樂町の段に、「チ、それが上分別、一、一時三里犬走り」 間一時間は今の二時

寸延びれば尋延る案じて濟まぬは金事と云々 「浮き沈みは世の習」 此も亦松

里犬の如く小走りに歩いての意味。『新版歌祭文』(野崎村の口)に「年、」 「兔の毛で突い

そ寄たれ此足に覺へが有、一時三里犬走り、日暮迄には戻つて來る」云々 「た程」 『平假名盛衰記』(松右衛門住家に「兔の毛でつゝい

た程」 たほども怪我させず、蟲腹一度痛ませず」云々 「浮き沈みは世の習」 此も亦松

右衛門住家の淨瑠璃の中の章句にして「浮き沈みは世の習ひ、私が妹此の津の國で勤め奉公する

さきく」さつゞけて暗に浮き川竹の流れに沈める勤奉公と云ふ意に響かせたるなど作者の用意

の至れるを見ること 「上榎と女房」 孰れの家にもなくてはならぬものさ云ふ意。『蘆屋道

が出來るのである。 『木にも萱にも心置く』 『假名手本忠臣藏』(七段目茶屋場

ぬものは、上榎と女房と世話に 「木にも萱にも心置く」 の段に、「つくづく思ひ廻します

もいふぢやないかいの」云々 飛脚大和往來(新口村の段の冒頭に、「落人の爲かや今は冬が来て、すき尾花はなけれども、世を

忍ぶ身のあさやさき」さあるのも畢竟は、此の俚諺の意味を解剖して書き分けたるものにして、

「冬枯してすき尾花のないのは落人の爲めではあるが、世を忍ぶ身は尙且つ前後が氣つかはれ

て、頼かぶりして人目を忍ぶ」云々 「杵で鼻」 杵で鼻こすつたやうで、にべもなく冷然たりとの意

が「四段目、生麥村の段に、「そんなおつかない事許して下され、」と云ふ意味である。 「口が動けば手が止む」 『紙

仕立兩面鑑』にア、や、かましやく、口が動けば手が止む。 「喧嘩は降物」 思はざる事思は

さ小歌ばつかり仰山で、根から仕事のはかばかゆかぬ」云々 「小尻

さ云ふ意味。『菅原傳授手習鑑』(四段目の口安樂寺の段に、「見れば雙方旅裝束、喧嘩は、

降りものさあつてから爰でしまひはつけさせぬ出やれくさいふなも聞ず」云々 「小尻

がつまる」 物事の押し詰つて融通のつかぬやうになるを云ふ。『夕霧伊左衛門廓文章』(原作、傾

城阿波鳴渡)吉田屋の段の冒頭に、「はみ出しつばも神さびてこじりつまりし師走

が

つ

ま

る

小

尻

が

つ

ま

る

小

の目」さあるのも、巧に此の俚諺を應用したもので、『冥途の飛脚』にも「方々への届け金が不埒になり、當る所かうそ八百いかう小尻がつまつて来た」云々、『紙子仕立兩面鑑』にも「新町へ漬りづめ、その鑑がつまつて、ヤリかたりを」
「子で子にあらぬ杜鵑」 『玉藻前織袂』に「子で子にあらぬ、自を」

此の歳月の御養育」さ云へるは此の俚諺の應用にして、『心中香庚申』の「名残の夏の薄衣、鶯の巢にそだてられ、子で子にあらぬ、杜鵑」云々 「言に鞘がある」

『伊賀越道中双六』(岡崎の段)に、「お頼なざるは本人の股五郎殿の有家御存じないとおつしやるはすりやお師匠の御詞に、鞘ああらうか、さ存じられ頼まれる方に力がない」云々 「子

供正直」 『本朝二十四孝』(桔梗ヶ原の段)に、「なんぼうすくめしやんし
ても、子供はごうでも正直な、わしが代うと抱きさる」云々 「牛蒡程の尾を

振る」 『神靈矢口渡』(二段目の切)に、「汝がやうなる臆病者は、牛蒡程な尾を振つ、
で、鎌倉武士に犬つくばい、様でも祇つて命を繋げと悪口だらう」云々 「自業自

得」 佛説の、自作悪業自得悪報の意味にして、『鈴鹿合戦』(阿漕、平治住家の段)に、「
自業自得さあきらめて、罪に沈むふびんさを、推量あれ次郎藏どの」云々 「死る子は

媚し」 『菅原傳授手習鑑』(寺子屋の段)に、「死る子は、みめふ。
しと美しう生れたが、可愛や其の身の不仕合」云々 「十夜の内には死

なる」 『天の綱島』(河庄内の場の小春の詞)に、「十夜の内には死
んだものは佛になるさ云ひますが、定かいな」云々 「證文が物言ふ」 『假名手

藏』(六段目)に、「ユレぐつともすつともいれぬ興市兵衛の印形、證文がもの言ふ」云々 「大地を見抜く」 紙背に徹するほどの眼光

見抜く也。『日吉丸稚櫻』(三段目)に、「大地を見抜く、
木下が詞に五郎助はりつめし、心ゆるんで」云々 「蟻螂の斧」 『伊賀越道中双六』(四段目

て進せうが、そりやもう蟻螂の斧さやら
申すことさいかの事ぢや」云々 「鷹は死しても穂は摘まず」 磯織にせまつて
も名義を守るさ

云ふ義。『假名手本忠臣藏』(五段目)に、「鷹は死しても穂
は摘まずさ譬に洩す入る月や、日數も積り山崎の」云々 「寶は身のさしあはせ」 『お夏

郎壽連理之松』(湊町の段)に、「寶は身のさしあはせ、十人並にもすぐれたお梅、乳守に賣つてと思ひ
付いても」云々、「さしあはせ」は「有りあはせ」の意味、さしあはせたる刀など賣拂つて其の場

を凌ぐの意味より「さしあはせ」
さ云へる語も出たるなるべし。 「高い木は風に折らるる」 『御所櫻、堀川夜討』(三
段目)に、「林の中でも

高い木は風が枝をば
折るぞさよ」云々 「旅のつかひは有合せ」 旅中不時の入用起らば有合せの金を流用
して間に合はすべしとの意味。『忠臣講釋』

〔壹内住家の段に〕石で手づめた貧の病旅のつひは看合とやら、
親子の中でも金銀の無心はごうやら言ひにくけれど」云々

「田を往ても畦を往ても」
〔長者の萬燈〕

「より貧者の一燈」
〔花の上野譽石碑〕志渡寺の段に、其方の其の親切が、届かいで何とせう、長者の捧げし萬燈よりわづか貧女の一燈が、百倍増したる未來の手向」云々

「提燈に釣鐘」「つり合はぬは不縁の基」
〔假名手本忠臣藏〕九段目、「大身な加古川殿の御息女、世話に申す提燈に釣鐘釣り合はぬは不縁の基」

「女郎の誠と鬼瓦の笑ひ顔」
〔無い物の比喩也〕時雨の炬燵」紙治内の段に、「コリヤヤイ、女郎のまこさく、鬼瓦の笑ひ顔は無いもん」云々

「長い物には巻れよ」
〔神靈矢口渡〕三段目に、「汝が武勇を頼にして、鎌倉へ弓引かんまは浅かな了簡、大きな物には呑れ長い物には巻れよ」云々

「二階から目薬」
〔男作五雁金〕天満砂原兵法の段に、「百二十里あちらの懸は、二階から目薬さしつけてくごく正九郎、憎まれ子世にはぶかる」

「人形書く子は頭かく」
〔器用清書を顔に書く子と手に書く子、人形書く子は頭かく〕器用不

「根掘り葉掘り」
〔根掘り葉掘り〕絶やさんさて、鶴の目鷹の目、油断ならぬ、讒者のしわざ」云々

「のけば長者が二人」
〔離れば雙方の利益、幸福なるべしとの意〕觀音靈驗記〕靈阪寺の段に、「のけば長者が二人の譬、わしが死ぬのはそなたに返禮」云々

「箸折りかみの兄弟」
〔往昔は、木にもあれ、萩にもあれ、其の儘折りて箸さしたるもの、故に箸折りかみ云ふるなれば、唯二人限りの兄弟と云ふ意味を箸折と云へる也〕かじみは鏡にして、顔兄弟は此の竹

「鉢坊主の手の内程」
〔鉢坊主の報謝米程〕假名手本忠臣藏〕七段目に、「お腹は立てられな鉢坊主の報謝米程取つて居て、」

「膝とも談合」
〔傾城反魂香〕將監館の段に、「思案なかげに邪魔入るも、そこ立つてうせぬかきこ、叱られてもおちればこそ、いや膝とも談合と申す」云々

「箸折りかみの兄弟」

「根掘り葉掘り」

「のけば長者」

「箸折りかみ」

「鉢坊主の手の内程」

「膝とも談合」

「羊の歩」 屠所の羊の歩み行くさま也。『玉藻前職秩』(道春館の段)「しほれ出たる屠所の送羊のあゆみたどぐさ最期の座にぞおし直る」云々 「人には添

うて見よ、馬には乗つて見よ」 『假名手本忠臣藏』(天川屋の段)に、「ヤレそれは迷惑お手あげられて下さりませ、總體人馬には乗つて見よ添うて見よ

申せばお馴染な御傍は」云々 「人の一寸我一尺」 他人の缺點は能く見ゆれど、我身の非を知るは難しい意。人の一寸は見ゆれども、我一尺は見ぬことの意

味也。『壽連理之松』(湊町の段)に、「ハテ人の一寸我が一尺、五つで貰ふて十八迄育てた親の恩を思はず」云々 「人の口には戸は立てられぬ」

『新版歌祭文』(野崎村之段)に、「そこの義理も絲瓜の皮となげやつて、こなきんさいつまでも添い遂げられるにして、戸は立てられぬ世上の口ぢやわい」云々 「孫は子

よりも可愛」 『蝶花形名歌島臺』(小阪部館)に、「武士の意地さは云ひながら孫は子よりも可愛と世の諺もあるものを見殺にする片意地はむごいつれない父上さ」云々

「待かね山の時鳥」 待かね山は攝津豊島郡玉坂村にありと云はる。『本朝二十四孝』(初段誓願寺の段)に、「上加茂、下加茂、金關寺、笠山の五體佛、西行、櫻三條、小橋、出合た

所が壬生の寺、四條河原の芝居、朝はさうからく、心は急所をつかる、意。『傾き符、われ山の時鳥、それは町中のじやれ詞』云々 「胸に釘」 城戀飛脚(新口村の段)に、

「二人ははつと胸に釘打ちう 焼野の雉子、夜の鶴」 雉子の子を生みて育てる時、野火に逢なづいて成程く」云々

も出て来たる煙の中に入り、終に焼け死ぬるに至る、されば之れよりして、「焼野の雉子」なる俚諺も出でたるなるべしと云へど如何にや。平たく解すれば、焼野に残る僅ばかりの叢を命として、其

の子を育むと云ふ義となる。『夜の鶴』は『詞花集』に、「夜の鶴都のうちにこめられて、子を戀ひつゝも鳴きあかすかな」さあり此の意なるべし。『玉藻前職秩』(鶯塚金藤次郎の述懐)に、「焼野の雉

子、夜の鶴、子を憐まぬは無しと聞く」云々 「八千代の玉椿」 莊子の『逍遙遊篇』に、「上古有大椿者、以八千歳

代は白玉椿、八千代とも何にたさへん限なければ」とあり。『繪本太功記』(十册目)に、「胸は八千代の玉椿、ちりてはかなき心根を察しやつたる十次郎」云々 「病は氣か

ら」 『観音靈驗記』(壺阪寺の段)に、「コレ澤市さん、病は氣からと云ふからは、お前のやうにしほくさふさいで計り居やしやんす、病は病は重ならう」云々 「湯の辭

宜は水」 『あまりに斟酌しよせば、本來の意味を無にすると云ふ義。』『繪本太功記』(十册目)に、「湯の辭宜は水とやら左様ならば、御遠慮なし」云々 「慾を知ら

ねば身か立たぬ」 『夕霧阿波鳴渡』(吉田屋の段)に、「あんな好い衆には、蹴られても損はいかぬ、慾を知らねば身か立たぬ、よく若に御萬歳」云々 「若い

時は二度ない」『心中二腹帯』(中の巻)に、「ちつこのおちめははでなれど、若い時が二度はないまのみ無理にもあらぬ筈」云々。

以上は主として今の流行淨瑠璃正本中に散見せる、俚諺の幾種を採録したるものにして、もと／＼此等淨瑠璃正本たる、多くは出雲、小出雲、半二、松洛、和吉、宗輔、一風、千柳、次では笛躬、應律、阿契、二步堂、三郎兵衛、一鳥等の手に成りたるものに係り、之を以て夫の門左衛門、海音、鬼外等の所作の正本に比すれば、文中俚諺を應用文飾したるもの太だ尠し。隨所に俚諺を應用して、才筆縦横の妙趣を發揮して居るのは實に近松門左衛門作の正本である。次では海音、鬼外等の作に於て、之れが應用の才を見るを得べし。由來俚諺の應用たる易きたるに似て實は然らず、文才素養二つながら相兼ねるに於て始めて能くすべきの事にして、其の應用の手腕如何を觀察し來れば、略ぼ其の作者の素養と文才との深淺巧拙を判することが出来るのである。されば左に近松門左衛門作正本中に應用せる俚諺の幾種を採録して、彼が才筆の片鱗を窺ふの資料に供すべし。

近松作世話淨瑠璃に應用せられたる俚諺

『長町女腹切』

「伽羅で作つた佛同前」「貧乏暇なし」

「ムウ大阪の伯母御とは、伽羅細工」「伽羅細工」は伽羅で作つた佛同前「ミ云へる俚諺の應用」の甚五郎の内儀か、ア、其の伽羅／＼、何かの御禮に疾ふ參る筈なれども、

主は細工の入寶、貧な世帯の暇なし「貧乏暇なし」の應用で、今日までの御無沙汰」云々

「頭痛でまだ起られぬか、他人ではなしなふ伯母御、寢所へ行て逢はつしやれ、お山狂ひで酒やら何やら過きる故、煩ひ暮して物も喰ぬ、少し異見して下され、そりやそこへ案内せいと、下地は好きに、下地は好きなり御、意は好し」の應用、据る膳、うま

い首尾とぞ成りにける」云々

「今日伯母が上らずば、二人の命は有るまいもの、有難や忝なや、愛宕参りの一し、親は泣寄り、他人は喰ひ寄り」の應用、他人は、るし、佛神のお蔭ぞと、意見も親は泣寄、喰ひ寄りの、二人が、肝に應へつゝ、泣より外の事ぞなき」云々

「其の取沙汰の國一杯、いはれぬ猪瀬が齒も立ぬ、刃物好して高知行の、高木殿と、はり合ふて、人中で恥辱うけ、あれでも武士かと云はやす、此脇指を買はいでは、一ぶん立ぬ祖父様の、武具馬具衣裳、夜の物までしろなして、三百貫の折紙代一倍増し、二百十兩に買求め、すぐに中心に一字銘、高木に勝つとの心にて、風といふ字、高い木は風に折らるゝ、高木は風に折らるゝ、を彫しるし」云々

「今夜はしよざいの無常風、沙汰はないこと、葬禮のもどり、ちよつと寄りたし心は急ぐ、ごふせふかこふせうこばを、候可候、にやつてすて、引導も何云ふたやら、不便や今日の亡者も、ろくな所へ行くまい」云々

「巽上り」(此の俚諺、ハア太郎左衛門様お宿にか、花めがて、西陣の九郎兵衛でござる、の巽は立身にして、居丈高と云ふ意、と巽上りに云ければ、亭主夫婦、ヤア親父來てか、此方へ、と茶釜と、或は龍の騰る、の、前、太郎左衛門顔しかめ、此頃だん、云ふ通り、そなたが娘お花、るも、ので、其の氣の、た、る)

盛んなるを云へるもか、熟れに慮するも活潑に無遠慮なる心持ちなるべし

「酔の莧蕪の」

屋で候、吳服屋で候の、酔の莧蕪のと、借錢が今の金で七八兩」云々

「彼の柄巻屋の半七といふ蟲がさいて、何の彼のと入性根、お花が一切呑こまぬ、

「東ふさがり」(東は春を司り、陽氣の發する方角なる故、必きなる東ふさがり云へるなるべし)

「壁に馬を乗りかせる」(急いで往きかせることを云へるも詰る)

「傍若無人」「盗人の晝寝もあてがある」

かぬもの」云々

「傍若無人の繼父、るせ笑ひ、やうぬかすな、盗人の晝寝もあてがある、

己が母に何の見込はないけれども、己を賣て喰ふ爲め夫婦になつ

た、今の詞は誰が教へた、半七の掏兒めに習ふたか、ベリくしやべる頬げた、蹴

「やぶれかぶれ」

放いてしまはんと、むしやぶり付を井筒屋夫婦——やぶれかぶれと半

七裾引からげ、井筒屋の庭へつかくく、柄巻屋の半七と聲をかけ、九兵衛を

取つて突のけ、真中にどつかどすはり、コレおやぢ、そなたはお花が繼父、酔につ

「酔につけ粉につけ」

け粉につけ、何につけ、彼の意義に憎いもことはり」云々

「藪から棒」

「かゝる哀れの最中、二階の楮子ぐわたくく、藪から坊主」(藪から棒の俚諺の應用の

ふつちやうがほ、お花そこに何して居る」云々

「おろす駕かこからぬつと出た、炮烙頭巾の醫者殿は、薬師如來の引合、壺屋の客と脈

を取る、それくく、花車も亭主も、槌で庭はく人呼びに、走る足元

お輕ぢやないか、お玉ぢやないか」云々

「そんな事に今まで歩いた事なければども、てんぼの皮往てのけふ、其

の間に用意して置かしやんせ」

「あれくく、五つばかりの子を真中に、乗合舟の女夫連、思ひなき

身の高笑、餘所のつまごどうらやまし、流れ渡りの情である、網の

目にさへ戀風が、たまる「網の目に風たまる」云々へ、荻の荻の上風」云々

「網の目に風たまる」
「人の心にいふか」
「貫之」網の目に吹き
「も」さ前句をつき
「たり」望一網をつき
「震」風のも句あまるや春

梅兵衛川「冥途の飛脚」

「籠かごの鳥なる梅川に、焦がれて通ふ里雀、忠兵衛はとぼくと、外の工

面内の首尾心は蜘蛛手かく繩や、十文色も出てくるは、蜘蛛手「蜘蛛手かく繩十文」

の應 南無三寶、日が暮ると足を空に立歸り」云々「誰ぞ出よかし、内

證を篤と聞て入たしと、我家ながら敷居高く、内を覗けば飯焚の、ま

んめが酒屋へ行く體なり、彼奴やつは木で鼻もきどを者「木で鼻をもぐ」

用「もぐ」を「もぎ」を見らべし たゞは云ふまじ」云々

「是を思へば世の中に、お仕置者の絶ねぬも道理、此上は忠兵衛も、盜

「木で鼻をもぐ」
「木で鼻をもぐ」
「木で鼻をもぐ」
「木で鼻をもぐ」

みせうより外はなし、男の口から斯様の事、言れうものか、推量あれ、咽より劍を吐くとても、「咽から刀呑む」の意を逆、是れ程にはあるまじと、絞り泣にぞ泣居たる」云々

「一金子五十兩、請取申さず候、右約束の通り、晚には廓で飲かけ、我等は大鼓、實正明白也、何時なりともさはぎの節、屹度參上可申候、依て紋日の爲、鬢水入件の如

「書いたものが物言意」（書類が證據の意）

し、と阿房のたらく書散し、さらばお暇申さうと、表へ出れば妙閑は、書いた物こそ物言へと、又瞞されし正直の親の心や佛の顔も、三

「佛の顔も三度」（佛の顔も三度撫れば佛腹立つるの意）より出た俚諺

度、飛脚「佛の顔も三度の應用」の江戸の左右、待夜も漸々更にけり」云々

「忠兵衛はよを忍ぶ、心の氷三百兩、身も懷も冷る夜に、越後屋に走り著き、内を覗けば、八右衛門、横座をしまして、我評判はつと驚き立聞す、二階には梅川が、心をす

「壁に耳」

ます壁に耳、漏るゝぞ仇の始めなる」云々

「小じりかが詰る」

「それ故に方々の届け金が不埒になり、當る所が嘘八百、いかふ小尻が詰つて来た」云々

「短氣は損氣」

「短氣は損氣の忠兵衛、傾城は苦界者、五十兩の目麿銀、取替た潜上、若い者に恥かゝせ、川が聞いたら死たかろ、懷の三百兩、五十兩引拔て、面へ撲付け存分

「男の嘴」（男の嘴は青くして喰違ひ居れるより、喰違ひ居る事、凡て男の嘴の云へる也）

言ひ、我身の一、分、川が面目雪いでやらう、アアされども、是は武士の金、殊に急用爰が大事の堪忍と、手を懷へ幾度か、とやせんかくやしやうげ鳥、鴉の嘴の喰違ふ、心を知らぬで、是非もなき」云々

「此の忠兵衛が五十兩損かけふかと氣遣さに、廓三界披露して、男の一分捨させ
る、但又、鳥屋の客に賄賂取つて、梅川に藁を焼き、彼方へ遣ふといふ
事か、おいてくれ氣遣ひすな」云々

「此在所まで詮議の最中、誰故なれば嫁御故、近頃愚痴な事なれども、世の譬にい
ふ通り、盗みする子は憎からで、繩かける人が恨めしいとは此事」
「盗みする子は憎く
かへらで繩かける人
か恨めしい」
云々

「斯うくした傾城に、斯うした譯の金があると、密に便宜もするならば、親は泣
「親は泣寄り」 寄り、親子なり、殊に母もない忤、隱居の田地を賣つても、首繩は付させま
い」云々

單に『長町女腹切』『冥途の飛脚』の二篇中に應用せる俚諺のみにても尙且右
の如し、他は以て推すべきである。序に近松作正本中に應用せられたる俚諺中の
幾種かを採録して、足らざるを補ふべし。

「あ・た・つ・て・碎・げ・よ」進んで決行し (此の小萬が手を合せる、男は當つて碎けいぢ
や)「伊達興作」 「合縁奇縁」「奇縁」は「機縁」の轉なるべし。縁は機のもの、合ふ
と合はぬとは全く人意の外なる事を云へるもの。 (人には

合縁奇縁、血をわけた親子でも、中のわるいがあるもの)「心中書」 「脚下から
鳥が起つ」事の意外に
突發する意 (内證で八貫めの質に入れたを、前の銀方が聞付け、そ

れとはなしに、此月の三日限に、家渡すか銀立るか、返事次第に、五日には目安す
げると、足もどから鳥の起つ様に、俄に町へ届たといふ)「大經師
昔曆」 「汕壺から

出たやうな艶々さ美しき喩

（槍の權三は伊達者で御座る、油壺から出す様な男、しん

どろどろうと見とれる男「槍權三重帷子」

「いさかひ過ての棒ちぎり木」（和殿

原は、主君の親をやみくくと討せ、其の場へおり合討手の一人も切とめず、いさかひ過ての棒ちぎり木「碁盤太平記」 「一升入りは一升」（サア娘の首を渡す

か、二十八貫目戻すか、二ツに一ツの返事を聞ふ、ヤイ一升入る袋は海川でも一升、かたのよい者の仕合見よ「高野萬年草」 「生身に餌食「大凡生物には自然の與へた殺さずの意に通ず。」

めた所になふ、生身に餌食、天道人を殺さず「生玉心中」 「往がけの駄賃「餘分の所得と云ふ意。」

（二人死より人きれば、往がけの駄賃ちや、父様も母様も、誰も一度は死る物、來世でゆるりと逢はふ迄「丹波興作」 「命長きは恥多し「長命すれば種々の憂目も見、恥を受くることも多しの意。」）

事なす事ぐりはまになり、存へて幾何の憂目を重ね見ん、命ながきは恥多し、嫁御去ばと、守刀を逆手に抜き持「曾我會稽山」 「生身は死身「生あれば必ず死ありの意。」（八年拜

まぬ親の顔見たふなふて何とせふ、生身は死身、もしひよつと死病うけたりとも、母様のなつかしさに、臨終も仕損ない「心中双は水の朔日」 「嘘八百「こわい事の

うそ八百、長者經となぞらへ、聲張り上げてよみにけり「博多小女郎涙枕」 「上を見れば方圖がない「方圖がないは「限り無し」の意也。」（上を見ればはうづがない、我より下を本とし

て上「内裸でも外筋「世間體は筋らればならぬ意。内裸でも外筋、男筋りのと受けて俚諺を應用文飾したる也。」（大引出の錠明けて、箆笥をひらりと飛八丈、京縮緬の明日はない、夫の命しら茶うら、娘のお末

が兩面の紅絹もみの小袖に身を焦す、是を曲げては勘太郎が、手も綿もない袖なしの羽織も交て郡内の仕末して著ぬ淺黄裏、黒羽二重の一ちやうら、定紋丸に蔦の葉ののきものかれもせぬ中は、内裸でも外錦、男鎧の小袖迄、さらへて物數十五色『天の網鳥』。「氏より育」「鳥は古巢」「胡馬は北風に嘶く」(扱もくあさましや、口と心が皆違ふた、氏より育ちが恥かしい、はではすはなる身に染り、うはの空なる世にならひ、親の事も古郷の事も、忘るゝ程のお心には、いつ成果た情なや、心なき畜類も鳥は古巢を慕ひ、北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか)『心中水の朔日』。「馬の耳に風」『更に何等の感』。(人の意見を馬の耳、そよ吹く風のふうぶうにて)『心中二枚繪姿』。「生れた後の早め薬」『其の效無き』。(己とだに知つたらば、蹴殺してすてんもの、よし／＼申して詮なきこと、疾く疾く首をめさるべしと、詞涼しく言上す、五郎丸きゝもあへず、ヤア生れた後の早め薬、口ばかりの廣言)『曾我會稽山』。「奥を聞ふより口聞け」『奥底を叩いて聞き糾さんよりは』。(それ／＼、奥を聞ふより口聞け、どこに心が直つた、虚言にも金貸して呉れとはいはれぬ義)『女殺油地獄』。「女さかしくて牛賣り損ふ」。(アノ景清はな、大宮司の娘おのゝ姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ、女さかしくて牛賣られぬとは御分が事ぞ)『出世景清』。「鬼に金棒」『力ある上に武器を得れば、一層強みを増すの意』。(イヤ久米之助様も、小判の事は請合れぬ、お梅様を裸體でならば、鬼に金棒で御座りましよ、コレ阿呆な事云はずとも、聲がおじやるか出て見よ)『高野萬年草』。「川中に

は立つとも人中には立たれず」人事―世渡りの
難きを云ふ意。

〔親里を振捨、扇のかけに宮

仕、ゆん手も他人、右手も他人、川中には立てども、人中には立たれずと申たとへ

の候ぞや」三世相

「堪忍藏の戸が開いた」

當時如此俚諺も存したるなるべし。但は「堪忍袋の緒が切れた」と云ふ俚諺の意

を取つて文飾したるものか。

（およそ薩摩二さいとて、九州ものは端喧嘩せず、武士と武士と

の口論に、面をはるは何事ぞ、こらへる程はこらよふが、堪忍藏の戸があいた、ま

一度眉をさいてみよ、腕骨切てきりさげん」用明天皇
職人鑑

「借りる時の地藏顔

返す時の閻魔顔」（歸るさを見て遠山は、姫君様の情ほど、我身の罪は重うな

る、かる時の地藏菩薩に捨られ、かやす時の閻魔の廳、どふ云てのがれふかど、涙

をかこふ神垣や、神も佛も見通しに）「鐵の草鞋で尋ねる」尋ねるに
苦勞する

傾城反
魂香

「鐵の草鞋で尋ねる」尋ねるに
苦勞する

意の（金の鞋で尋ねても、二人ともない女郎に、思はるゝ與次兵衛殿はあやか

りもの」壽の
門松

「咸陽宮も亡び時」

如何に堅固で宏壯なものでも廢滅
の時來れば亡ぶ―其の時云ふ義。

（借々浮

世は知れぬもの、江戸屋勝二郎と云ふては、石火矢でも崩れまい長者の家と云

ふたれ共、咸陽宮も亡び時、一時の間にいとしばや」淀鯉出
世流徳

「錐は袋」囊中の自
錐の自

然も其の尖頭を露はすが如く、事の秘
密も自然に洩れ露はるゝを云へる也。

（いや聽たでもなく聽ぬでもなく、餘り傍か

ら聽にくゝ、謠を謳ひ紛したり、申してもやす大事、拙者は他言致すまいが、錐は

袋と他よりの取沙汰は存せぬと、振り切出るを絶りとめ」堀川波
の鼓

「木から

落ちた猿」頼みすがる所の
無くなりし意味。

（どこへ取りつく枝もなき、木から落ちた猿、婆、こど

ね殺せて下され」關八州
繫馬

「暗闇から牛引出す」

おやめもわ、
ぬと云ふ意。

（御痛はしや蟬

丸は、何の報か憂世の暗戀慕の暗の闇がりに引出す牛は昨日かも御幸の車引かへて野飼にやつす綱手繩「罫丸」 「果報は寝て待て」人の福徳は天意にして、人力の左右する所に非ざる

の意ざる (誠に果報は寝て待てとや、悪七兵衛景清を打つてなりとも、搦めてなりとも、まるらせたるものならば、勳功は望み次第との御制札)「出世景清」 「毛を吹

いて疵を求むる」つまらぬ事して却て其身に禍するを云ふ意 (ア、聲高な合點ぢや、請取せんと駈入るも、人は見すとや、硯水、瀧本流の墨色や、なま中常に無筆ぞと、僞る筆の毛をふ

いて疵を求むる類かや)「碁盤太平記」 「下戸と化物は無い」 (姿は老女、頭は親

仁、下戸はなくとも、化物はある世なりとぞ吹き出しける)「彌八州繫馬」 「師走坊

主―師走浪人」みすばらしげな一癖れな行装した人の喩 (ア、紙衣障りが荒い、これ引けば破

れる、搦めば跡に師走坊主、師走浪人、昔は鎗が迎ひに出る、今はやうく長刀の

草履を抜いで編笠の」「夕霧阿波鳴渡」 「七人の子はなすとも、女に心許すな」 (も

と此女は王子の執權生駒の宿禰が娘、君の爲には大怨敵、親ゆゑに貞女の道破

るやつにはあらねども、七人の子はなすとも、女に心ゆるすなど、申す世話も有

といひ、一つは世上の人口、恩愛も、執著も、情も、思も、戀も、怨みも、御大事にはかへ

られず」「用明天皇職人鑑」 「主と病には勝たれぬ」 (寝そやされてあの女子は、律

義もので達者で、心のまめなまめ者よ、豆腐賣りが通るは、そりや夕飯よ、やうや

うしまふて洗足すりや、はや入相のかねつける間もあるにこそ、小隅へよつて

睡るとすれば、夜食をせよと夕飯の、まだ間もないと思へ共、主と病にかたばね

も「勝たれぬ」を「肩骨」おればつかりが奉公か、人もすりやこそ摺鉢に、此摺木の太さもさきかせは太うてもざまばつかり「用明天皇職人鑑」「手が、すけば口があく」「仕事休めば活計に困る」

意の (夫婦の手ばつかりの商賣、手があけば口があくで、自づからの御無沙汰)

「心中及は 氷の朔日」 「人間萬事塞翁が馬」「人間の福福の定めなきを云へる意」

(ごまめ繪の素浪人、雑

煮の上置輪ん切大根、ずんでんごうく打治つた、時世に逢ふも他生の御縁、花

の宴椽から落ちたお乳の人、打つた所がふくく福徳、千歳を呼ぶ鶴の聲、此方

はにあつて雀はちうく、鳥はかあく、鳶そろく山の諸精のついたる妻戀猫、

猫の化粧鼠の嫁入、ちうつちつくり色をやる、戀から生れた人間萬事、塞翁が馬

のうつた太鼓の撥、狸がうつた腹鼓、うつたら鳴るべい、何になるべい、知行にな

るべい、なれくなれく、花に馴來し王城の町、其方に高山去年の雪「雪女五枚羽子板」

「坊主が憎けりや袈裟まで憎い」 (積られた、騙された、逢初し時の誓文を、金輪

際と思ひ詰め、男を大事にかけるゆゑ、今の母に逆ひて、常々疎み憎まるく、袈裟

まで憎い世の譬、今の年忌の佛まで憎まするは我戀故「薩摩歌」「百丈の木に

登つて一丈の枝より落る」「油断を戒むるの意」「千丈の堤も蟻の穴」の意に同じ。(母方の一門、妻の縁者、天

下の詮議にかゝらん時、人の心まぢくにて、見苦しき事もある時は、屍の上の

恥辱也、百丈の木に登つて一丈の枝より落つるとはこゝの事「碁盤太平記」「秘

事は睫毛」「睫毛は目の側にあれども見ぬざるが如く、世に秘傳など云へる事も手近な易き事なれども習はざれば得難しこの意」(ハア、眞の臺子

安い事、傳授許しは請ねども、秘事は睫毛、何でもない事)「棺の櫃三重帷子」「人の振

り見て我振り」(開く櫛箱鏡臺の、此鐘より世の中は、人こそ人の鐘なれ、人の振見て我振の善きも悪きも身の手本)『櫛の權子』重帷子「懷中で錢よむやう」無言でさし俯

形容也。

「産所の夜伽」

天無言で女の見振りをする

(何でも一生の思ひ出、お情に

預らふと存じたに、いかな莞爾と笑顔も見せず、一言の拶挨もなく、懷中で錢よむやうに、扱て伏向いてばかり、首筋も痛みはいたさぬか、何と花車殿茶屋へ来て産所の夜伽する事は、竟にないづとぶつつけば)『天の網島』「麥飯で鯉を釣る」

小資本で大利を得るの意。

(是を與へば美味に愛で、若宮を始め行平一家歴し、魚一疋で天

下を取るは、麥飯で鯉を釣竿や、手々におろす鈎針の、さきをめぐらん報の程」

『松風村雨束帶鑑』

「藪にも功の者」藪醫にも偶には功の者ありとの意。

(大成論、格致論、素問靈樞十四

經、入門難經、脾胃論、脈論、運氣論、萬卷の書に眼を曝した此坊主、醫者は見掛に依らぬぞ、對の六尺乗物が煎じて飲るる物でもない、一僕連れぬ我々でも、藪に功の者、何な大病でも仰付られ、活すか殺すか何方へぞ、驗は見せふと自慢する)

『源氏冷泉節』

「來世金」

此世では間に合はぬ惜いものと云ふ意味。

(ア、惜い人ぢや、夕霧くくと云ふ

て、親方にかい金儲けてやつた女郎ぢや―あつたら金をあの世へやる、これがほんの來世金ぢや)『名霧阿波の鳴渡』

奇人ご笑話

素人連中には奇人もあれば、奇行もあり、又頗る振つた珍談逸話を残した人も尠くないのである。古きは姑く措くとしても、明治時代に於てさへ雷聲齋がある。今團平がある。今左に漫録的に、此等笑話の二、三を拾録して、本書の卷末を賑はすこととする。

奇人 雷聲齋

雷聲齋は淡路屋と云ふ北濱の旅館の主人―大阪天王寺の一心寺に「萬國無雙音曲乃司雷聲齋貴山翁之碑」と云ふ墓まで建てたほどの奇人にして、此の人と今團平とは、明治時代に於ける素義界奇人の二幅對とまで云はれたほどの評判男である。己れの聲筋に居たら病人ができる、怪我人ができると云ふのが此の人の自慢で―其の聲雷の轟くが如くであること云ふ意味から取つて、雷聲齋と名附けたのださうで、既に其の俳號からして振つて居る。

左様な天狗であり、自慢であるから、翌日病人が出来ないと機嫌がわるい。あなただの淨瑠璃の聲筋に當つて怪我人が出来ました、病人に成りましたとなれば、若干かのものになる。ごんな三絃弾きにでも「弾いてくれ」ではない、「一遍貴様に

己れの聲筋に居たら怪我人
が出来る

弾かしてやる」——斯うだ。併し其の自慢も餘りに圖抜けて居るので、寧ろ可愛ところがあつた。されば太夫でも三味線弾でも、からかひ半分——いろく徒らもして構ふて居たものである。

或時自宅で催會をして先代吉兵衛が弾く事になつた。出し物は平素から自慢の『楠昔噺』の三段目である。

「貴様實際己れの三段目が弾けるか」「おやぢさんねらさうに言ひなはんな、幾ら若い奴等がぐつぐつ言ひくさつても駄目だ、私の腕を見なはれ」「生意氣なことを言ふな、一番弾けるなる弾いて見い」

と云ふやうな譯で、吉兵衛はからかひ半分——向ふ鉢巻……いふ位の所まで弾いて置いて「ウンく」うなり出す——眼をまわした振りをする。「水ぢや水ぢや」「サアく代りく」といふ騒ぎ……代りが無いと言ふ……其の比吉兵衛の門弟になつて居つた舊勘治の門弟の野澤八兵衛——これもなかく人氣のある若手の三味線弾——之れが出て代る。今度は肩衣どころぢやない、肌を脱いで向ふ鉢巻……「サア來いおやぢ」と言つた調子……夫れで本人は何にも御存じなし、正真正味に嬉しがつて居るといふ次第。

たしか明治十八年の大洪水の時——市中は船で往來をして居ると云ふ騒ぎの最中に、堂島の仲買の番頭連の悪戯——一ツ「雷聲齋」をおだて込んで、からかつて見るのも面白からうとばかり、五六人連で誘ひ出して、濁水滔々の中を網嶋の方へと

「水ぢやく」代りく」

「サア來いおやぢ」

乗りかけて来た、

「おやちどうだ、斯う云ふ所で淨瑠璃が語れる位でなかつたら、眞箇ほんまの淨瑠璃語りとは言はれまい」「何ん吐かすのや、こんな所……屁でもないわ」「そんならお前語つて見るか」「三味線が無いやないか」「三味線がなうて淨瑠璃が語れんなら淨瑠璃措おけや」「そんならやるッ」

遂とうく『楠昔噺三段目』と『一の谷三段目』と二段語つた。此方はさんざんからかッて置いて、飲んだり喰つたり……ハアく言つて歸つて来る、雷聲齋は泥々どろどろになり、「もうく船ぢや淨瑠璃は眞平だ、語り悪わるふてドモならん」……此の人にして此の言あり、よくく懲りたものと見える。

陶器せとものや何にかを積んで置いて——其の實陶器ぢやない鉢わし力の鐘かねだ——がらくがらくと落下おちこした音をさして、「おやちさん、あんたの聲筋にあたつて、こんなに毀これましたせ」とやると、「そりや氣の毒だ」と損害賠償しんがいばいしょうを置いて行く。出し物は大概おほむねは『楠昔噺』の三段目か『一の谷』の三段目、そして他の眞似まねのできない藝をやする。『谷三』では青葉の笛を吹く、夫れが口笛だが妙を得たもので、ヒューッとする。眞正の笛を吹くやうな佳い音が出る。吹いた後では口を開いて扇子あふぎで搔か廻まわす眞似をして、口中何にもない一種も仕懸しけんもない——と云ふ態ぶたいをして示せる。それが又如何にも愛敬で……『楠昔噺』の三段目では、宇都宮金綱の馬の假聲かこゑを使ふが此が又頗る振つたもので、「シャンコくくくくグーくく……ハイく、シ

洪水中に淨瑠璃二段

『一の谷、三』では青葉の笛

『楠昔噺、三』では馬の嘶なげき
聲

ヤンユ〜〜〜バァ〜〜〜ハァ〜〜〜」——此の二藝が大の自慢で、他の
淨瑠璃を語つて居る時でも、「おやぢ吹いた」と聲が掛ると、「よしやヒュー」と
吹く。もう一つ、「よしや、ヒュー」……如何にも愛敬のある男であつた。

備後町に備一と云ふ大會おほいなどをやる料亭がある。何でも日清戦争の少し前—
二十四、五年頃—其處で大會を催した事があつたが、無論雷聲齋には案内なし。
目な催しの時には、來られて迷惑だからわざと敬遠的に案内しないところが何うして知つたか、長い紙に「本日雷聲齋貴
山翁必ず出席」と書いたやつを持參の上出懸けて來た。

「オイ若い奴居るか」「未だ何誰も連中はんは見ねまへん」「箱屋を呼べ、これを
張り出せ」「おやぢさん何しまんね」「おれが出てやる、何だ今日は……何故番
組におれが顔を出さんのや、一體誰が世話して居る」「誰ちうことはおまへん
ね」「誰か頭あたまだつた者があるやろ」「へエ西の義調はんだす」「義調呼んで來い」
と云ふ譯。備一には前に黒の門がある、其處へ其の長いやつを貼らして歸る。

ところが堂島にろせう(蘆笑?)と云ふ男がある。經師屋の主人で取引所の米の檢
査員、

「何ぢやい、こりや誰が斯んなことをしたんぢや」「おやぢさんが直接ちかに持つて
來やはりました」「笑はれるがな、構かまやへん、おれが辯解してやる」

雷聲齋來て見ると肝腎なものが貼つてない、見物は一杯入つて居る。

「こりや、おれが今日書いて來たものをごないした」「堂島の蘆笑さんが來やは

蘆笑の頓智

りまして、ごもならんと言ふてな、取らりました」「蘆笑を呼んで来い」……
 「お前生意氣なことをするな」「おやじさん怒んなはん、それより俺は何ぼ迷惑したか知れないせ、お前が出るといふので、前は一杯の人でな、巡査さんが来て、雷聲齋が出ると云ふからこんなに見物が立つのだ、早速取つて了へ、わらい叱られたんや」「ソリヤねらい氣の毒やな、ごもならん、そんなむちや、言つたらごも仕様がな、まア聴かうか」といつた調子……

所が備一の横町は大阪の八百屋街で小鳥屋が多い——小鳥屋連中が詰め懸けて居る。「一杯飲んでやらうぢやないか」と言ふ相談……

俺ア宜い、巡査がや、まし
 い

「オイおやぢ、今夜は『楠』か『谷三』か、何方や」「俺アな、何方でも宜いのんやがな、巡査がやかましふてな」「巡査がやかましい、見物が入れなくなつたらそれで止めたらねえのや、入れなかつたらねえのや、俺引受た」「オイ——生意氣なことを言ふな、巡査はどうでもねえとして、此處でおやぢに語られて堪るもんかい、席を變へて貰へ席を……此處でおやぢにだけね聲をされたら鳥が死んで了ふ、第一に商賣に障る」「それもさうやなア」「おやぢさん、どうせう、鳥が眼廻して了ふ、あんたの聲を聴いてびつくりして死んで了ふ、商賣の邪魔になると言ふのや」「そりや氣の毒やな、他のことならごんなでも構はんが、商賣の邪魔になつてはいかん、まアねえわ、こんな時は氣色が悪いから止めや」……
 ……ところが又濱仲仕の一連が来て居る。これが八百屋連中と氣脈を通じて

鳥が眼を廻して仕舞ふ

遂うく飲代にされる

金縁で表装した六枚の扁額

機會があつたら聽いて見て
教へて遣る

居つて油をかける。

「おやぢさんやつてやれく、商賣の邪魔になると言つて俺アあなたの淨瑠璃を聽きに來たんや、聽かんでは承知でけん」「コリヤぢもならんがな、警察からやかましようて巡查が仰山來よつたと言ふし、八百屋街の前でそんなことをしたら商賣の邪魔になると云はれるし」「何でね、おらお前の淨瑠璃聽きに來て居るのや、ごど何誰だ、そんなことを吐かしたのは」「あの人や、あの人やな」「汝ア生意氣なことを言つて邪魔しやがるのんだな」「何言ひやがる」「何が商賣の邪魔になる」「何を言ひやがるんだ」

喧嘩を始める。「ア、おれが十圓出す、一杯飲んでくれ」……遂うく飲代にされて仕舞ふ。

雷聲齋の居室には金縁で表装した葉書の扁額が六枚も掛けてある。先の盲人の住太夫、越路太夫、呂太夫など、兎に角名高い人のばかり、文言は「今度自分が何々座で何々を語るから悪い所は直して戴きたい」と言ふやうなものばかり、「玄人のくせに生意氣な何こきやがるんだ何れもく情ないな今の太夫は機會があつたら聽いて見て教へてやる、其方へやつて置け」と云ふやうな調子……其れ等の葉書の中から選り抜いで金縁にして六枚——其の實孰れも皆誰かの門弟どもの惡戯で、葉書を出して置いて翌日あたり、「おやぢさん今日は」と言つて出懸ける。

「おのれの師匠は何ぢやい、あれだけの太夫になつてけつかつて、己に淨瑠璃教はら

にや語れないなんて、家へ歸つて言へ、おら怒つて居たつてな」斯うして幾らかの纏頭にあり附いて歸る。

豊澤今團平

雷聲齋と二幅對の奇人
誰でも掴まへては語れく

語り賃として五十錢づく

時々駒が外づれたり糸が切れたり

雷聲齋と二幅對の奇人は豊澤今團平と云つた上町の鬢付油屋の主人。此れは又三絃の方の氣狂。誰でも引つ掴まへては語れくと言ふが、對手になり手がないうゝ文樂の下場を呼んで來ては若干かやつては語つて貰ふ。立賣堀の猪喰屋橋に席がある。何時も詰らぬ娘太夫や素人連中が掛る。玄人では餘り上等は掛らない。其處へ今團平が一枚看板でかゝるのである。誰にも弾かせないで、五人でも十人でも一人で弾く、其の代り弾き賃でなく語り賃としてみなく五十錢づく、……『豊澤今團平』と麗々しう書いた大看板の行燈がかゝり、太夫は小さく、佐野太夫が眞なら佐野太夫と下へ貼紙で下げる。ところが其れ丈の天狗で居ながら調子ができない。太夫はからかい半分、半途頃へ行くど何節でも構なし、流行唄でもヨサコイでも、ませこせに語りまくつても、今團平は一生懸命。其の又三絃がなつて居ない、時々駒が外れたり糸が切れたりする。それでも手だけは習つた通りに動かして居ると云ふ次第。素人三味線彈の變人と云へば此人が大将……

眞面目な時は店へ出て一かう表を見わたして居る。太夫か三味線彈が通ると呼込んで、店の錢箱から攫み出して、目配せしながら袖の中へ押込んでやる。それ

妙な手附で握らして遣る

で文樂などの人形使ひの下廻りの連中は、おやぢ一人で店の突端に出てやに下つて居るのを見計らつてはやつて行く。「今日は、お暑うございます」と云つたやうな調子……すると今團平さん妙な手附をして、顔で斯うしやくりながら、袖の下から握らしてやる。

「おやぢさん、一遍あなたのを聴きていなアと何某太夫が云つてましたせ、あの歳になつて能う弾きなはるつて」「さう言ひよつたか、フシ」と言つた調子で、ホク／＼喜んで居たものである。

御影の島儀

御影の酒屋で島儀と云ふ人があつた。淨瑠璃は可なり達者には語つたが、稽古は餘り良くなかつたやうだ。舊い固い淨瑠璃……切れ方も良つたので、一杯負擔せやうか位の積りで頼みに行く。

「おやぢさん、今晚何處何某でやりますが、あなた一つ来て貰ねまへんか」「オー俺ア工合が悪ふて、淨瑠璃罷めやうか知らんと思ふて居る」「何言つて居なはる、あなたが淨瑠璃罷めなはると、御影に淨瑠璃が無くなつて了ひまつがな」「そんなに皆やかましんなら——お邪魔だけどもなア、今夜行かれるか知れん——工合が悪いんでな」「そんなことを言はんで、是非頼んますせ」「何を演ればねくのや」「あなたのねくのをな」「俺のは皆ねく、二つ三つ言ふて見ん

あなたが罷めたら御影に淨瑠璃が無くなる

俺のは皆ねく

『逆櫓』は大々上々吉

五十人や六十人なら『忠、
四』で澤山

か」「『逆櫓』はどうだす」「『逆櫓』か、まア待ち、『逆櫓』か『逆櫓』……帳面を操りながら指で押へ『逆櫓』と云ふたら是れやないか……大々上々吉や」帳面には一々等級が記してある。「見物は何ぼ位来る」「サア素人の家やさかい、餘計来た所で五六十人位だつしやらう」「あかん——これは千人以上の代ものや、芝居で練つた大々上々吉や」「へ、エ恐ろしい難かしいもんだすな……『寺小屋』はどうだす」「『寺小屋』……これでも上々吉や、お寺を借りい〜、お寺やつたら三百人位来るやろ」「ソリヤどもなりまへん、そしたら何演つたら宜うおまんのや」「五十人や六十人やつたらなア、……『忠臣藏』の四段目——短かうてねえ、此れで澤山や、これ持つて行け」(床本を抛り出す)「へエ」「持つて行け」「おやぢさん、もつと賑なものやれまへんか」「賑かなものをやつたつて仕様がないやないか、嫌なら措けや」「チャ、まア、どうかお頼申します、あんたのは遅いけども、早うから来て若い者の世話をしつてやつとくはなはれ」「宜しい」

根が嗜きだから五時過にはチャンと出懸ける。「何してけつかるのや、何奴も何奴も、碌に淨瑠璃も語れんくせをして、呼んで来い〜」と斯である。自ら品評して、大々上々吉から上々吉、大の吉まで、一々等級を附け、見物の多少に依つて出し物の見當を附ける。其れが眞面目だから面白い……

御影では今の菊正宗の嘉納治右衛門——一時櫻正宗が面白くなかつた時、菊正宗で成效した——餘程舊家だ。其の分家に柳店と云ふのがある。加納柳店——此の店

其の鳥儀はこゝに居ります

親子連れの乞食巡禮―親が
五貫に子が二貫―乞食巡禮
大福く

の主人が義太夫の達人で、商賣人となつて柳適太夫となつた……其の柳適太夫が東京から歸り、眞打で御影の芝居で興行と云ふことになつた時の事―大變な人氣で湧きかへるばかり。「ヤレ日本―」「御影の寶」などゝ聲がかゝる。鳥儀も毎日聽きに往つて居る。所が一日聽客が「ヤレ日本―」と褒めて置いて「併し御當所には鳥儀さんと仰しやる方がござります」とやつた。すると見物の中から「エヘン」と咳拂して「其の鳥儀はこゝに居ります」……「こゝに居ります」が如何にも振つて居るので今に一ツ話になつて居る。

生玉の順禮歌修行

東京で奇人と云へば洲崎の〇〇樓名を祕す其のの主人で俳名が生玉……大の天狗だが餘り好い稽古でない、まづい淨瑠璃……『阿波の鳴戸』を稽古して見たが巡禮歌が甘くいかない。眞正ほんまの稽古したら屹度良に極まつて居ると云ふ譯で、どう親子連れの乞食巡禮を呼込んで仕舞ふた。親が五貫に子が二貫、七貫七十の錢の日當で晝飯ひるには臺のものか何かの残りを喰くして貰ふので乞食巡禮大福く。家内中は毎日くの「ふだらくやく」で大惱み。それでも自分だけは會得した積り、淨瑠璃は兎に角、詠歌だけは天下一品ちやと大威張り、恐らく文樂の太夫でも、本職の御詠歌を習つた奴は一匹も居まいと云ふ權幕、明けても暮れてもの「巡禮に御報捨」で娼妓連こどもが笑ふ「汝達みづからたちは何がおかしいんだい、お茶ばかりひいて居や

がつて」……家内では面白くないと云ふので、上野公園にと出懸けて往った。

摺鉢山に上つて此處だとばかり、暮りにいゝ氣になつてふだらくやをやつて居ると、巡査が聞き付けた。見ると可い歳をして御詠歌をやつて居る。

「オイ、貴様何をして居るのか……」「何です、どうしたんです？」「其處に何して居るのか」「……」「そんな大きな聲をしてはいかん、歸れッ」「へい、へい」

（巡査が去ると又やり出す。棄てくも措けないので又戻つて来る）「一體貴様ア何か、馬鹿ッ、何處の人間だ」「深川の者です」「深川は何處だ」「洲崎です」「洲崎の何だ」「貸座敷の主人です」「貸座敷の亭主……一體何しに來たんだ、此處に」「義太夫の稽古をして居ます」「義太夫の稽古……洲崎から此處まで……歩いて來たのか」「俥が待つて居ます」「俥が待つて居る」（的つきり氣狂なりと認定した）「俥は何處に居る」「あれが私の俥です」「コラッ、なにか貴様は此の人間を乗せて來たのか」「左様でございます」「今夜此處へ何しに來たのか」「今夜ではございません、每晚參ります」「何するのちや」「何ちや知りませんが、あの山へ上つておいでになります」「氣狂ぢやないか」「どう致しまして本氣です」「義太夫の稽古をして居ると云ふが、さうか」「イヤもう……此の頃は『阿波鳴戸』の巡禮歌で、家内中困つて居られます」「何時頃からか」「何でも二箇月ばかり乞食が稽古に來まして」（巡査も噴き出さざるを得なかつた）「明日ツから此處へ來ると言つても寄越すなど云へ……いゝ年をして」……

まるで落語の筋

奥方様にも涙を零して御感心

まるで落語の筋を實地で往つたやうな滑稽談。

生玉にも雷聲齋と一緒にの珍談がある。會でもあつた翌日には誰かど悪戯をや
る。「御前事昨夜何處其處の何屋で貴方の『阿波の鳴戸』をお聞きななりしが、未
だ嘗て大阪邊りから來た太夫でさへ、あの位に語つた人はないとの御意——奥方様
にも涙を零して感心被遊。近日是非く何處かで今一度聽かして貰ひたいとの
御意である」と云つた様な文句で、何々伯爵家扶、何々子爵家従など書いた葉書
を出して置いて、時刻を見計らつては、ひよつこり出掛けて往く。「イヤどうもすば
らしい出來でしたネ」「受けたつてネ、此れ……華族さんから葉書が來たよ、奥さん
も泣いて御座つたと書いてある。何うだ……今の華族さんなんて、なか／＼油斷
がならないよ、又催らう」斯うしてさん／＼ばら遊んで歸る。

笑話數題

素義界の奇人、奇行は未だく數多けれど、ほゞ／＼にして之を略すること
として、左に眞面目にして而も抱腹に値する笑話の三、四を擧ぐるこ
ととする。笑話の主人公の氏名は孰れも判然して居るのであるが、わざと
之を秘することとした。

辯慶の薙刀讀みと云ふ比喻もあることなれど、這は又、より以上に愛敬のある實

話。

「コレ聲殿よ、もやく」

「ゾう急がるくものドいの」

「ニしによう似た三人のこ
ロも」

「どうやらつんど心がシま
めみツかい夏のフト夜さ
に」

身振り手振りの淨瑠璃

近松座の『千兩幟』の大絶句

『忠六』の「コレ聲殿よもやく、くく」とは思へども合點いかぬ」と往くべきを、
どう取り違へたものか、「コレ聲殿よ」と語り跡は「もやく、くく」……………

旅行先きで各所の稽古所巡りなどやつて見ると、お國なまりの愛嬌澤山な頗る
振った所を聽かされて痛み入り、感心して引退ることも度々なるが、「ゾう急がる
るものドいの」太功や「ニしによう似た三人のこロも」左倉などは、まだく愛敬の
少ない方で、「どうやらつんど心がシまぬみづかい夏のフト夜さに」鎌倉三などく
來ては腹を抱えずには居られなひのである。

よく淨瑠璃に合せて身振りをする！手なり顔なりで形をやつて見せる語人が
ある。「内を覗いて」夕霧吉では指を丸くして眼鏡のやうに目の所に持つて來る、
「時はなれし時鳥」玉藻では、兩手を袖に突き込んで鳥のやうな恰好をして、ピヨイ
くくと尻を持ち上げて見せると云ふやうな風で……………曾て大連の素義界にも此種
の語人が一人……………

絶句は素人ばかりでなく、歴乎とした太夫にさへ往々あることで、大正五年の近
松座の五回目興業中八月『千兩幟』の掛合―長子太夫の猪名川に、錦太夫の鐵ヶ嶽、
雛太夫のおとわ―「留守の内に今日の角力割はこなんだか」と往くべきところ
を「今日の内に」……………と切り出したので後句が繼けず、遺頓智即妙の長子太夫も
持てあぐみ、「ウー……………來なんだか」で僅かにお茶を濁さうとしたが、おとわの雛

陀左衛門押開かず

「思へばくそのこのが」

「だいの蓋の釜とつて」

「大事のく大々寺の方丈
背せぼねがしのぶ障子し越し」

太夫はお可笑しさが込み上げて来るので、「イエーくまだ何んにも持つては」と半泣きの體で語る。「さいなむ折から、ハイ今日の角力割……と床では琴太夫が語つて居るのに、今度は人形が出て來ない、錦太夫も詮方なく「陀左衛門押開かず」とやつたので、雛も長子も耐たねくた可笑さが一度に破裂して噴き出し、聴衆も笑ひ崩れてしまふたと云ふ笑話さへある。

素人連中となると、高座に上れば兎角ドギマギくと慌て込んで仕舞ひ、平素は考へさへ附かぬやうな間違ひ、字違ひをやつて大愛敬を振り播くことがある。

『艷容女舞衣』の「思へばく此の園が」を「思へばくそのこのが」——やつて折角の當て所を滅茶くにしてしまふたり、『本藏下屋敷』の「だいの蓋の釜とつて」を——「だいの蓋の釜とつて」——などとやつて、コボレマスくと半疊を打ち込まれて見たり、『花雲佐倉曙』の「大嬌のく善提寺の方丈さま」を——「大事のく大々寺の方丈さま」——とやつて打ち毀はしたり、『御所櫻』上使の「しのぶが背骨障子越し」を——「背ぼねがしのぶ障子越し」とやつて笑はせたり、其の愛敬澤山な——真面目な滑稽の中に、又別種の面白味があるのである。

阿波の某漢學塾の老先生の息子、一たび斯の道に指を染めて以來、今日は詩會——明日は輪講と、老先生の手前を繕ふてはしきりに唸り廻つて居たのを、薄く耳にした老先生、いよくと云ふ所を突き止めて置いて、窺そとと立聴きにと出懸けて見ると、息子の若先生は夫れと知るべき筈もなく、町家の某の家で月並會の催し、今し『阿

漢學先生の觀た三味線の功
能

見臺と額とすれく

「波鳴戸」十册を語ッて居る。聽客は一杯の入り、語り口が可笑わかしんのでワーワツと盛んにませツかへして居ると云ふ始末……然るに老先生は頗る感心して悦に入り途次書生への話しに、「元來『阿波の鳴戸』と云ふ淨瑠璃、素讀みにしてさへ涙のこぼるゝもの、夫れにどうぢや、三味線にかけるとアノ様に皆が引ツくりかへッて笑ふやうに陽氣なものになる。三味線と云ふものは實にエライものだ……此れには書生も何とも應答が出来なかつたさうである。

堺の住吉邊で有名な義太夫狂の先生——次第——に前かごみにかごみ込んで來て、果ては見臺と額とすれくになるまでかごみ込んで來ると云ふ癖の先生があつた。師匠此亦、わざとも其名を缺くも注意して平常より八ヶ間敷云へど其の場限り——或時臨時の催會、出し語物は『日吉丸雅櫻』小牧山 城中——念のために師匠もクドくと注意する——五郎助實は加藤忠左衛門清忠なれば其の積り……陰腹かげばらの間は兎角勇者の風貌かぼうが偲しのばるとやう……就中その中「煙草スバく」の所は最も大切、前かごみにかごみ込んで、第一スバくと云ふ本文の意味に合はないと云ふ小言——雖然本人は平氣の平左、心得て居るヨ、心配なし、此れ位反りくり反かへつたならいふだらうと、身振りまでして見せての事なれば、師匠も多少は安心して床に上あがつたが、語り出すとかごみ出す——見臺を抱かかね込んで來る。「娘の最期に目もやらす」にかゝる頃は、モト額が見臺にすり附いて居ると云ふ始末。師匠もたまらず、思はず床を叩いて注意すると、本人氣は附いたが慌て過ぎ——「煙草スバ」と反りくりかへつた拍子に後

煙草スバ

繼いて又スパ―

纏頭を樂みに辛抱肝要

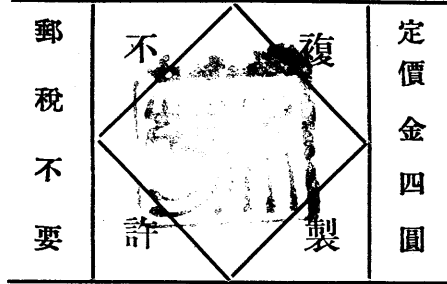
高座の最先に居たものが最
高額

方にヅ・デ・ン・ド・ウ——聽客はワ・ー・ワ・ツと云ふ騒ぎなので、先生今度は一層の狼狽——早々高座に這ひ上がり、頭を見臺に突き出すや否、後半分の繼き足し、突然「スパ―」とやつたので又わきかへるやうな騒ぎ、遂々一段の淨瑠璃は滅茶く……

東京の魚河岸の間屋の主人、大の義太夫自慢、結構くで聽いてさへ居れば、可なり奮發して纏頭も出るとの事を聞き附けた野幫間の一連、是非一段拜聽と願ひ出て見ると、日ならず百尺亭料にて聽かすべしとお達し、淨瑠璃は拙くとも纏頭を樂みに辛抱肝要とばかり、扇子の影で欠呻を噛み殺しながら、たて續けに二段―丸こかしのヒドイ所を聽かされたれど、肝腎の纏頭は出ず、一寸した御馳走で逐ッ拂はれ、コ・ボ・ス・まい事か、大コ・ボ・シにコ・ボ・シて引上げたか、年の暮になり、先日の一統にとあつて五十圓の纏頭——其處で野幫間の一連寄り合までしているく評議の末「之れは聽料なり、惱まされ料なれば、高座の最先に居たものが最高額―夫れから順に額を下げるのが至當だ」と云ふ事に一決し、分配額の半分ツ、出し合ツて、吉原に繰り込んだと云ふ事實談……座り順で等級を附けたなどは頗る振ツて居る。

義太夫手鑑終

義太夫手鑑



大正七年十二月八日印刷
大正七年十二月十日發行

發行者兼

大連市乃木町

秋山清

印刷者

大連市東公園町十七號地

嶺田嘉三

印刷所

大連市東公園町十七號地

株式會社 滿洲日日新聞社

大連市東公園町十七號地

發行所 株式會社 滿洲日日新聞社

東京市神田區神保町三番地

大阪市東區唐物町(加島屋)

東京 誠堂

竹中清助

東京市日本橋區本石町三丁目

大阪市南區疊屋町

至 誠堂

淨瑠璃雜誌社

東京市神田區錦町一丁目

大連市大山通

誠文堂

大阪屋書店

東京市京橋區數寄屋町一番地

朝鮮京城本町一丁目

大阪屋書店

大阪屋書店

販賣店